

# 聖徒の道

8  
1997

末日聖徒イエス・キリスト教会



# 聖徒の道



## 表紙

ジェローム・ラビエール（18歳）のような若い活発な末日聖徒たちは、カナダのケベック州で霊的な遺産を築いている。ここでは、日常生活の中に伝統や歴史が息づいている。（本誌「わたしは忘れない」p.40参照。写真撮影／リチャード・M・ロムニー）。

## こどものページ

安息日の勉強（絵／シェリ・リン・ボイヤー・ドットィー）。

## 一般

- 2 大管長会メッセージ——霊的な思い 大管長ゴードン・B・ヒンクレー
- 8 ザイールから主の宮へ クテカ・カムレテ
- 20 心に留めますか、それとも無視しますか デール・S・コックス
- 26 群れに戻る
- 34 布につづる時の流れ ペトレア・ケリー
- 48 「神の栄光にひたすら目を向けて」 ベス・デーリー

## 青少年

- 10 召しにこたえる ジャック・H・ゴーズリンド
- 16 ノブーのティーンエージャー，ヘンリー・サンダーソン  
ウィリアム・G・ハートリー
- 32 備えはできているだろうか マウロ・プロペルツィー
- 40 わたしは忘れない リチャード・M・ロムニー
- 46 象の突進 テリー・リード

## 定期特別記事

- 1 読者からの便り
- 25 家庭訪問メッセージ——「あなたの信仰があなたを救ったのです」

## こどものページ

- 2 たんけん——偉大な町の建設 シェリー・ジョンソン
- 4 ジェシカと『モルモン書』とロー兄弟 ラレイン・ウィットティア
- 7 おもちゃばこ グライダーをとぼそう
- 8 分かち合いの時間——ヒーローとヒロイン カレン・アシュトン
- 10 自転車が教えてくれたこと アルマ・J・イエーツ作
- 14 モルモン書物語——でしたちをしゅくふくされるイエス



本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、セミア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

**大管長会:**ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト  
**十二使徒定員会:**ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーグス、M・ラッセル・パレード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリング

**編集長:**ジャック・H・ゴースリンド  
**顧問:**L・ライオネル・ケンドリック、ウィリアム・ロルフ・カー

**教科課程管理部責任者**

**実務部長:**ロナルド・L・ナイトン  
**企画・編集ディレクター:**ブライアン・K・ケリー  
**グラフィックスディレクター:**アラン・R・ロイ  
**ボーグ**

**国際機関誌スタッフ**

**編集主幹:**マービン・K・ガードナー  
**編集主幹補佐:**R・バル・ジョンソン  
**編集副主幹:**デビッド・ミッチェル、ディエーン・ウォーカー  
**編集補佐:**ジェニファー・グリーン・ウッド  
**工程管理:**マリアン・マーティンデール  
**出版補佐:**ベス・デーリー

**デザインスタッフ**

**機関誌グラフィックスディレクター:**M・M・カワサキ

**アートディレクター:**スコット・バン・カンペン  
**デザイナー:**シェリー・クック  
**制作主幹:**ジェーン・アン・ピーターズ  
**制作:**レジナルド・J・クリステンセン、デニー・S・カービー、マシュー・H・マックスウェル  
**予約購読スタッフ**

**ディレクター:**ケイ・W・ブリッグス  
**配送部長:**クリス・クリステンセン  
**マーケティング部長:**ジョイス・ハンセン  
**聖徒の道1997年8月号第41巻第8号**  
**発行所** 末日聖徒イエス・キリスト教会  
 〒106東京都港区南麻布5-10-30  
**電話** 03-3440-2351

**印刷所** 株式会社 リック

**定価** 年間予約/海外予約2,400円(送料共)  
 半年予約1,200円(送料共)  
 普通号/大会号200円

Copyright©1997 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1995年9月 翻訳承認—1995年9月 原題—International Magazines August, 1997. Japanese, 97988 300

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて資料管理部配送センターへご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. and Canadian subscription price is \$14.00 per year. SIXTY days' notice required for change of address. INCLUDE ADDRESS LABEL FROM A RECENT ISSUE. CHANGES CANNOT BE MAID UNLESS BOTH OLD ADDRESS AND NEW ONE ARE INCLUDED. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P. O. Box 26368, Salt Lake City, UT 84126-0368, USA. SUBSCRIPTION HELP LINE: 1-800-453-3860, U.S. EXT. 2947; CANADA EXT. 2031. CREDIT CARD ORDERS (VISA, MASTERCARD, AMERICAN EXPRESS) MAY BE TAKEN BY PHONE. PERIODICALS POSTAGE PAID AT SALT LAKE CITY, UTAH.

**POSTMASTER:** Send address changes to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O.Box 26368, Salt Lake City, Utah 84126-0368, U.S.A.

**大管長会からの勧告**

大管長会メッセージは、わたしたちがどこから来て、今なぜここにいるのか、そしてこれからどこへ行くこうとしているのかを思い起こさせてくれます。世界中の兄弟姉妹について知ることができ、証が強められました。このすばらしい機関誌「リアホナ」(スペイン語版)に感謝しています。『リアホナ』は、わたしの生活の中でも家庭の中でも、重要な位置を占めています。

カリフォルニア, サンタアナ南ステーク,  
 ミッション・ビーゴ第5支部  
 セシーリヤ・ゴンサレス



**アリス・スプリングスの模範**

『デア・シュテルン』(ドイツ語版。「星」の意)1996年3月号の「アリス・スプリングス」の記事にとっても感動しました。この号を何度も閉じては、結局この記事を読み直すためにまた開いてしまいました。この記事で紹介されている若いオーストラリアの兄弟姉妹が、主に仕える模範を示してくれたことに感謝したいと思います。すべての若い人々が、主の業において強く忠実であるようにと願っています。

ドイツ, ライプツィヒステーク,  
 ホエンスタイン・エルンスタール支部  
 ギーゼラ・ルドビッグ

**伝道の道具**

伝道に出る前、職場の同僚に『リアホナ』(ポルトガル語版)に予約購読のプレゼントをしました。3か月後、彼女はバプテスマを受け、今では忠実な教会員となっています。

宣教師として、この機関誌の中から記事を見つけて求道者と分かち合うようにしています。そして求道者たちは必ずそれらの記事に関心を持ってくれ、御霊を強く感じてくれるのです。この機関誌は活用次第では、すばらしい伝

道の道具となります。

ブラジル, レシフェ伝道部  
 ヘベジア長老



**絶えざる啓示**

『ラ・ステラ』(イタリア語版。「星」の意)を読むことは、わたしにとって霊の充電時間となっています。天父が絶えざる啓示を下さり、この機関誌の中でその靈感に満ちた言葉を読むことに心から感謝しています。

特に、1996年11月号のゴードン・B・ヒンクレー大管長の「エリヤの霊」という記事に感謝しています。わたしは家族歴史活動が好きです。信仰込めて探求すれば、喜びと平安を感じることができ、家族は永遠に結ばれます。イタリア, ミラノ・ステーク,  
 ミラノ第1ワード  
 ラウラ・カリオ

「質疑応答」コーナーでは、青少年の皆さんから次の質問への回答を募集しています。1997年10月1日必着で、下記までお送りください。

QUESTIONS AND ANSWERS  
 International Magazines  
 50 East North Temple Street,  
 Salt Lake city, Utah, 84150 U.S.A.

回答は日本語でお寄せください。手書き、ワープロ、いずれでもけっこうです。手書きの場合は、かい書ではっきりと書いてください。氏名、住所、所属のステーク/地方部、ワード/支部名を明記し、できれば写真を同封してください。

質問——自分の家族について心配しています。兄や弟を教会に行かせることは難しく、姉も活発な会員ではありません。彼らが両親に敬意を示すこともあまりありません。どうすれば家庭をもっと幸福で、霊的な場所とすることができのでしょうか。



# 霊的な思い

大管長  
ゴードン・B・ヒンクレー

証

「わたしたちが行動を起こし、導き、教えるときに、わたしたちから導きを受ける人々のためにできる最も重要なことと言えば、それは、その人々が、心の中に、神の御子であるイエス・キリスト、すなわち世の贖い主であり、救いの源である御方について、いきいきとした、活力のある、燃えるような証と知識を育て上げることができるよう助けることです。それは、この御方は、世の罪を贖い、救いと永遠の命へと通じる道を開いてくださいました。わたしが心から願うことは、わたしたちがどんなことを行うときにも、何らかの形で、教会員の心の中に、絶えず、救い主に関する証を養いたいということです。人がその心の中に、主イエス・キリストがまさに生きておられるという真の証を持っているとき、ほかのものはことごとくそのあるべき姿に取まります。わたしはそのことに満足していますし、また、それが十分満足できるものであることを知っています。……これを源として、末日聖徒と呼ばれる人々から、あらゆる美德が生み出されていく

のです。」(1996年2月10日。ユタ州プロボで行

われたブリガム・ヤング大学既婚学

生のための地区大会神権指導

者会にて)



「わたしたちから導きを受ける人々のためにできる最も重要なことは、その人々が、心の中に、神の御子であるイエス・キリスト、すなわち世の贖い主である御方について、いきいきとした、活力のある、燃えるような証と知識を育て上げることができるよう助けることです。」



### 贖い

「この御業が神の業かどうか、心に疑いを持っている人がいたら、最も豊かな実である贖いがだれにでも与えられるということの重要性について、深く考えてみていただきたいのです。確かに、復活は、神の恵みによりあらゆる人々に授けられるものですが、それ以上に、福音の原則を受け入れ、その原則に従って生活することにより、昇栄と永遠の命にあずかれるという輝かしい教えでもあるのです。わたしはそのことに心から感謝の気持ちを抱いています。」  
(1995年8月30日。英国ノッチングムで行われたファイヤサイドにて)

### 幸福への道

「主の道は幸福への道です。悪事は決して幸福を生じたことはありません。背きも決して幸福を生じたことはありません。罪も、不従順も幸福を生じ

たことはないのです。幸福への道とは主の道に従うことです。わたしはそれを心の底から信じています。『モルモン書』全体を貫くメッセージがあるとしたら、それはこの偉大で比類のないメッセージです。すなわち、民が義にならなかった生活をしているときには、幸福で繁栄していましたが、一度、悪事に陥ってしまうと、悲惨な有様となり、戦いに走り、貧困と問題を抱えながら生活していたということです。このテーマは『モルモン書』全体に流れています。『モルモン書』の時代にそれが真実であったように、現在でもそれは真実です。この教会の民にとって幸福への道とは、主の道に従うことなのです。」(1996年2月18日。ハワイ州オアフ島で行われた地区大会にて)

### わたしたちは聖約の民です

「わたしたちは聖約の民です。そして、これは非常に重大なことです。この教会が回復され、主がその回復の目的を宣言されたとき、主は、回復の理由の一つは、主の永遠の聖約が打ち立てられること、言い換えれば、再び打ち立てられることであるとされました。……さて、この神権時代にあって、その永遠の聖約はすでに確立されて

います。実際、わたしたちはバプテスマを受けたときに、その聖約を交わしました。わたしたちは、文字どおり、神の聖なる家族の一員となったのです。神の子供たちは皆、神の家族の一員ではありますが、すばらしいことに、ある意味では、神と神の聖約の子孫との間には、特別な関係が存在します。……わたしたちは聖餐を頂く度に、わたしたち一人一人のためのその命をささげてくださいった神の御子の犠牲を思い起こすだけではなく、それに加えて、自分自身にイエス・キリストの御名を受け、その戒めを守ると改めて聖約します。すると、主は聖なる御霊を祝福としてわたしたちに授けてくださると聖約して下さっています。わたしたちは聖約の民です。そして、その聖約に伴う義務は偉大なものなのです。」(1996年6月14日。デンマーク、コペンハーゲンで行われたファイヤサイドにて)

### ジョセフ・スミスの信仰

「ジョセフが〔森の中へ〕入って行ったときには、まだ少年でした。わたしは時々、主がなぜ14歳の少年を森の中に招き入れられたのか、不思議に思うことがありました。なぜ、主は〔ジョセフが〕20歳や30歳、40歳になるまで、お待ちにならなかったのでしょうか。そうすれば、年齢とともにそれなりに成長していて風格も出ていたでしょう。しかし、ジョセフは森の中へ入り、主はそれをよしとされて、ジョセフの問いにお答えになりました。それは、少年ジョセフが主に完全な信頼を寄せて森の中へ入ったからです。ジョセフの心の中には一片の疑いもありませんでした。ジョセフはこの時のことを、だれか知恵を必要とする者がいるとすれば、それはまさしく自分であり、その知恵を願ひ求めることにした、と

言っています。祈りの結果として何かが起こるだろうという完璧な自信があったのです。わたしたちには、ジョセフがどのような祈りをささげたのか、その記録はありませんが、ジョセフが問いかけ、その後、言葉のやりとりがあったことは知っています。そして、ジョセフ・スミスはその間に、それがどれくらいの時間だったかは分かりませんが、神の本質について、実に多くのことを学んだのでした。あらゆる時代の博識な聖職者たちが学んできたことを合わせても、決して及ばないほど多くのことを学んだのです。」(1996年7月12日。ニューヨーク州ロチェスターで行われた宣教師集会にて)

### 家族の宣言

「わたしたちはなぜ今、このような家族の宣言を出すのでしょうか。それは、家族が今危機にさらされているからです。世界中、どこを見ても家族が崩壊しています。社会の改善を始めるべき場所は家庭の中にあります。子供は、おおかた、教えられるとおりに行動するものです。わたしたちは、家族を強めることによって、世界をより良いものとする努力をしているのです。」(1996年5月18日。東京で行われた記者会見にて)

### 配偶者に対する虐待

「妻たちを優しく扱ってください。この世の大きな悲しみの一つに、あらゆる国々で幾世代にもわたって人々の間に見られる事例があります。それは、妻に対する虐待です。自分の子供の母親である妻を虐待する者は、神権を受けるにふさわしくありません。どうぞ、妻に対し、愛と敬意と感謝の気持ちを表してください。皆さんが天の王国で最高の栄光に到達するためには、皆さ

んの伴侶と手に手を取ってそこまで歩いて行かなければならないのです。主がそのことを明らかにされています。」(1996年6月14日。デンマークのコペンハーゲンで行われたファイヤサイドにて)

### 青少年の皆さんへ

「皆さんは素晴らしい世代です。皆さんの内には、偉大な、素晴らしい、善いことを行うための大きな力が備わっています。どんな人であろうとも、皆さんのそのような行いのじゃまをしたり、妨害したりすることは許されません。また、皆さんを傷つけたり、痛みをもたらしたりする可能性のある冒険には、それがどんなものであっても、決して足を踏み入れないでください。『賛美歌』にあるように、「力尽くし 霊尽くし 自由のため 戦え」という精神で、義をなしてください(151番)。もし今自分がかかわっていることが間違った方向に進み始めているとしたら、そこから抜け出して、かわりを絶ってください。勇気をもって義を行い、主に頼ってください。そうすれば、主は素晴らしい方法で皆さんを祝福してくださることでしょう。」(1996年4月14日。コロラド州デンバーで行われた青少年の集会にて)

### 教育

「わたしたちの教会は、教育に非常に大きな力を入れています。教会には非常に興味深い現象が見られます。最近の研究で、教会員の教育が高ければ高いほど、教会で活発に活動していることが分かったのです。これは非常に意義のあることだと考えています。多くの人々が、宗教というのは教養もなく生活に安定も見られない人々のため

かし、先ほどの研究からは、一般的に言って、教育のレベルが高ければ高いほど、教会には活発に集うという結果が出ています。わたしとしては、これはすばらしいことだと考えます。非常に重要な事実を示しているからです。」(1995年8月28日。ロンドン・ニュース・サービスのローレンス・スパイサーとのインタビューで)

### 祝福師の祝福

「神権指導者の皆さんにお願いします。祝福師の祝福の重要性を理解できる年齢に達しているすべての人が祝福師の祝福を受けるよう、彼らを励ましてください。わたしは、自分の受けた祝福師の祝福を、自分の人生で最も神聖なものの一つと考えています。祝福師の祝福は、それを受けるにふさわしい生活をしているすべての教会員にとって、ほかに類を見ない、神聖で個人的な素晴らしい祝福になるはずですが、兄弟の皆さん、とりわけ監督会の皆さん、どうぞ、このことについて会員とよく話し合って、適切な助言をしてください。また、わたしは、祝福師の皆さんが、祝福師としての神聖な召しを果たすに当たって、皆さんの手を人々の頭の上に置くとき、祝福されて主の靈感と啓示が授けられるよう、心から望んでいます。神権の権能と祝福師の職と召しにより、主イエス・キリストの御名によって祝福師の祝福が授けられるとき、それは、ほかに類を見ない、個人的な素晴らしい祝福となるのです。」(1996年4月20日。ユタ州ミスフィールド・ローガン地区大会の神権指導者会にて)

### 宣教師として奉仕することでもたらされる祝福

「伝道を終えてからこれまでのわた

しの人生で、素晴らしいことがたくさん起こりましたが、その出発点は、すべて、この地でわたしが宣教師として働いた経験にまでさかのぼることができます。」(1995年8月27日。イギリス、ロンドンのハイドパーク教会堂の再奉献式にて)

### 神殿と神殿結婚

「〔神殿は〕何と荘厳で美しい建物でしょうか。しかし、この建物がどれほど美しかろうと、この建物自体は、目標に到達するための手段でしかなく、建物自体が目標なのではありません。この神殿が建てられ、奉獻されたのは、この時代に主が啓示された神聖な儀式を執り行うためです。その神聖な儀式の中には、この世から永遠にわたっても続く結婚の儀式があります。この世界のどこを探しても、そのような儀式はほかに存在しません。わたしは、皆さんが結婚について希望を抱くとき、皆さんが人生で決して誤った道にそれることがないように、主の宮で結婚するという決意をしてほしいと願っています。」(1996年3月24日。カリフォルニア州サンディエゴの独身成人のためのファイヤサイドにて)

### 若い女性の皆さんへ

「わたしは、今日、ここに集っている若い女性の皆さんに申し上げたいと思います。この世で自分が置かれている境遇について決して劣等感を持ったりしないでください。皆さんは神の娘です。わたしは、天のお父様が、その息子たちと同じようにその娘たちをも愛してくださっていることを、よく知っています。頭を上げて堅く立ち、義と信仰、徳と真理の中で歩んでください。自分を卑下したり、安売りをしたりしないでください。皆さんは神の娘な

のです。愛する若い女性の皆さん、どうぞ、神聖な受け継ぎにふさわしい生活をしてください。皆さんはいかなる意味でも劣っていません。福音の計画の下で、皆さんは神の娘なのです。わたしたちは皆、この偉大な神の計画の中で、果たすべき役割が与えられています。与えられた召しや才能、責任を尊び、またわたしたちの内にある優れた特質を尊び、それを大いなるものとするのがわたしたちの責務なのです。」(1995年10月29日。アイダホ州レックスバーグで行われたリックス大学地区大会にて)

### 安息日を守ること

「安息日は実に大切な日です。この日は、エホバがこの地球と地球にかかわるすべてのものを創造されたとき、その御業が最高点に達したことを表すものです。天地創造が完了したとき、エホバはこれを御覧になって、良しとされ、安息日に休息を取られました。さて、わたしは、教会員の皆さんに、日曜日には買い物をしてないように、お願いしたいと思います。『わたしが多少買い物をしたところで、それほど大したことではあるまい』と言う人もあるかもしれませんが、それは皆さんにとっても、皆さんの模範を見ている子供たちにとっても、大きな影響があるのです。一部の地域で見られるような日曜日に買い物をする習慣を取り入れないようにしようではありませんか。」(1996年2月24日。ノースカロライナ州シャーロットで開かれた地区大会の神権指導者会にて)

### 敬虔

「わたしたちは聖餐会にもっと力を入れ、あらゆる意味で礼拝の時間とする必要があります。敬虔な精神を培い、

礼拝堂に入るときに静かで敬虔で思慮深い態度を養ってください。過度にざわついた音が聞こえます。わたしたちは社交的な人間ですが、礼拝堂の中にまで、大きな声で社交活動を持ち込まないよう願っています。」(1996年4月27日。ペンシルベニア州ピッツバーグの地区大会にて)

### いかなるときでも福音に従って生きること

「皆さんが信じている宗教は、1週間に7日間実践する教えです。日曜日だけの教えでも、教会にいる3時間だけの教えでも、セミナーにいるときだけの教えでもありません。どんなときでも、1日24時間、1週間に7日間、1年間に365日、実践する教えです。」(1996年1月13日。ユタ州パロワンで行われた青少年のためのファイヤサイドにて)

### 人生の意味

「皆さんは人生の目的も意味も知っています。皆さんは永遠の計画の中で、この地上に来る前にも目的をもって生活していました。この世に来ることは使命であって、単なる経験ではなかったのです。わたしたちはいつの日にか、幕のかなたに行きますが、それでも進歩と成長を続けます。イエス・キリストの福音が回復されたために、わたしたちは人生の意味をはっきりと把握しています。人生の意味についてわたしたちほどはっきりとした概念を持っている人々を、わたしはほかに知りません。」(1996年3月24日。カリフォルニア州サンディエゴで行われたヤングアダルトのファイヤサイドにて)

### 子供たち

「子供たちは両親を敬う必要があります

ます。子供たちは、『あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである』（出エジプト20：12）という主の戒めの下にいます。子供たちはわがままな心を抑え、愛と理解、訓練と知恵とを求めて両親に頼る必要があります。』（Church News『チャーチニュース』1995年6月7日付け）

### 家族の祈り

「この教会の家族は皆、一緒に祈りをささげてください。もちろん、一人一人が祈りをささげることは重要なことですが、家族で祈りをささげることもすばらしいことです。信仰をもって天父に祈ってください。主イエス・キリストの御名によって祈ってください。子供たちのために良い習慣を付けたいと思ったら、家族の祈りのときに順番に祈らせ、自分の受けている祝福に感謝の言葉を述べさせること以上

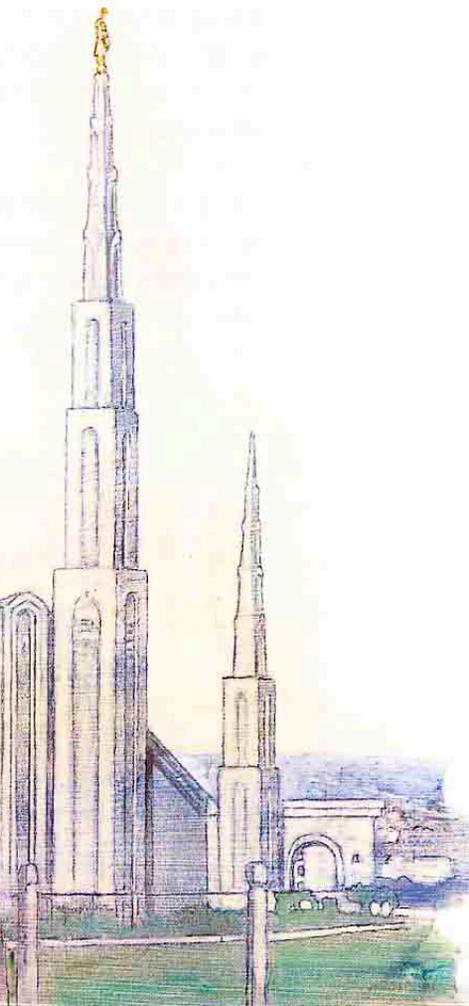
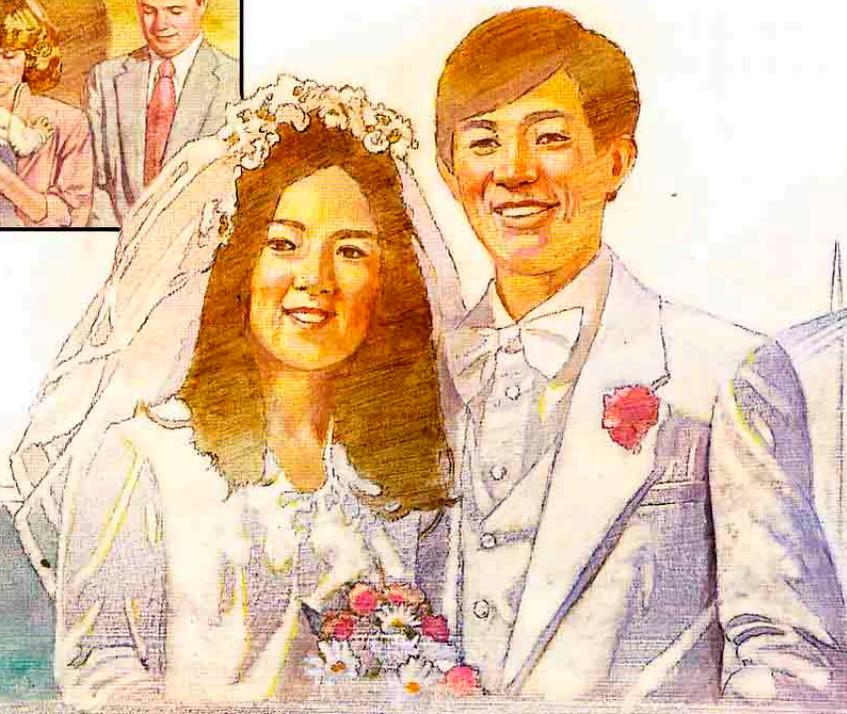
に、良いものはありません。子供たちがまだ幼いうちにこれを実行したら、その心に感謝の気持ちをもって成長していくことでしょう。」（1996年5月20日。沖縄那覇ステーキと沖縄軍人地方部の合同ファイヤサイドにて）

### 死

「死は人生の一部です。わたしたちが永遠の生活を送るに当たって、基本的に避けられない部分です。もちろん、残された者にとって死は悲しい出来事ですが、わたしたちは、死という経験を経ずして、来世でわたしたちを待つ偉大な御業に携わることはできません。義にかなって忠実な生活をしてきた後で、次の世に赴く者にとっては、死もまた美しい経験であることに、わたしは満足感を覚えています。」（1996年2月23日。ユタ州ソルトレーク・シティーで行われたハリー・V・ブルックスの葬儀にて）□

### ホームティーチャーへの提案

1. 主はその僕が語ることに<sup>しほ</sup>ついて、次のように言われた。「何であろうと聖霊に感じて語ることは……主の心となり、主の思いとなり、主の言葉となり、主の声となり、救いを得させる神の力となる。」（教義と聖約68：4）
2. ここに掲載されている説教の中から、ホームティーチングを受ける個人や家族にとって励ましとなり、祝福となる題材を、祈りをもって選ぶ。



# ザイルから主の宮へ

クテカ・カムレテ  
ILLUSTRATED BY JERRY THOMPSON

わたしは、妻のナンブワ・アンボ、そして二人の息子カバンバ、カムレテとともに中央アフリカのザイル（訳注—現コンゴ民主共和国）に住んでいます。わたしたちは皆教会員です。三男のブンビは1996年12月にこの世を去りました。

時々教会の機関誌で、大きな犠牲を払って神殿に参入する会員たちについての記事を読むことがあります。信じ難いような出来事が起こり、神殿に参入する助けとなる様子にいつも感嘆しています。しかし、自分にも同様の出来事が起ころうとは想像もしていませんでした。

キンスカにあるわたしたちの家は、もっとも近い神殿のある南アフリカから遠く離れた場所に位置しています。わたしはよく、「神殿推薦状をもらって何になるだろう、どのみち神殿に行く経済的な余裕などないのだから」と思ったものです。しかし、1994年、ハワード・W・ハンター大管長から、たとえ神殿から遠く離れた場所に住んでいても、すべてのふさわしい教会員は神殿推薦状を受けるようにとの勧告がなされました（『聖徒の道』1994年11月号、p.6参照）。大管長の言葉がわたしの心に強く響き、わたしは支部長に面接を申し込みました。しかしそのときはまだ、天の御父がわたしのためにすばらしい祝福を備えてくださっているとは知る由もありませんでした。

わたしはザイルの国民議会議員の下で働いています。1995年の暮れ、彼は北朝鮮訪問の招待を受けました。公式訪問を申請するために必要な書類にすべて記入したとき、同行者の名簿にはわたしの名前も含まれていました。しかし、ザイル政府はこの計画を承認しませんでした。

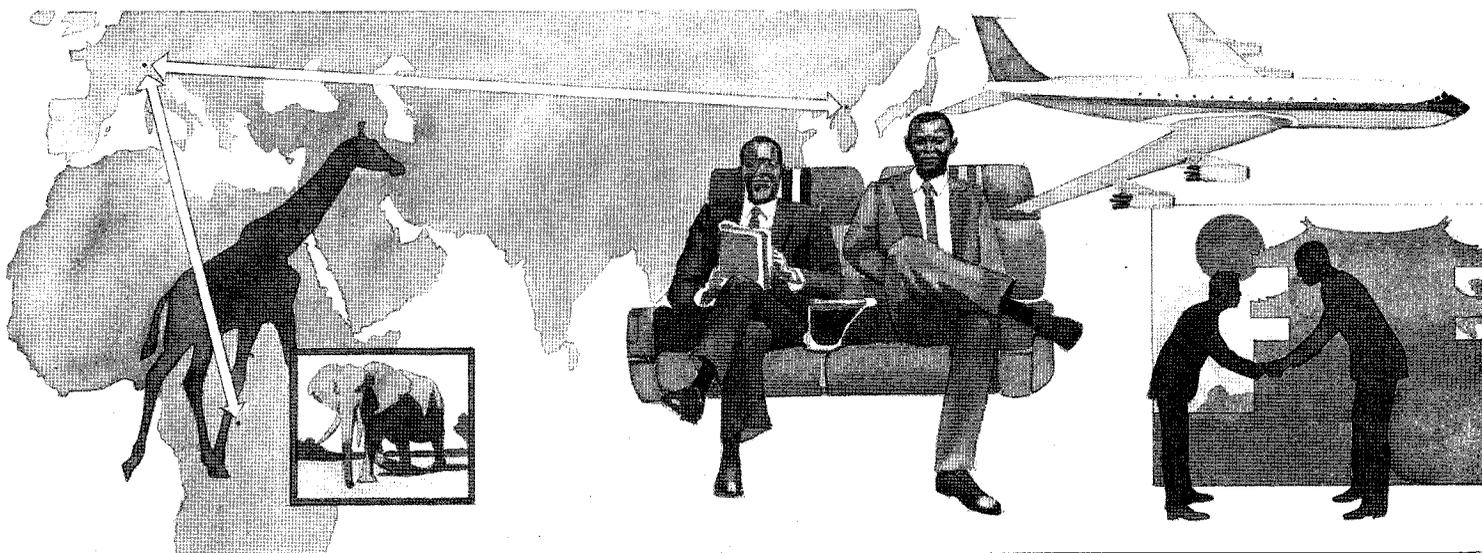
それから、政府の承認を得るため上司の長期間にわたる交渉が始まったのです。

わたしは、計画が承認され自分の名前がリストに残るよう、神権指導者たちに一緒に祈ってくれるように頼みました。4か月がたち計画は承認されました。そのときリストに残っていたのは上司とわたしの名前だけでした。

わたしは胸の高鳴る思いがしました。しかし、北朝鮮には神殿がないことを知っていたので、今回の訪問がわたしにとってどれほど重要であるかまだ理解していませんでした。訪問が許可されたという知らせを受けたとき、心の中に次の言葉が静かにささやかれました。「急ぎなさい。訪問の日程にスイスを加えなさい。」そのとき初めて、もしかしたらスイス神殿に行けるかもしれない気がついたのです。

早速わたしは上司のところに行き、北朝鮮への往復はスイス経由にしてはどうかと進言しました。彼に異論はなかったので、航空チケットと通過する各国へのビザの申請手続きを取りました。信じられないことに、ビザが届くとほとんどどの国が短期間の通過ビザのみ発行したのに引き替え、スイスだけは一か月間滞在できる観光ビザを送ってくれたのです。

わたしたち二人はザイルをたち無事北朝鮮に到着しました。天父はいつもわたしとともにおられました。御言葉に従って生活し、回復された福音の良き模範となる強さを与えてくださいました。季節が冬だったため、何度も熱いお茶を勧められました。しかし、わたしはいつも知恵の言葉に忠実に従いました。北朝鮮の高官たちとテーブルを囲むとき、彼らは皆ティーカップやコーヒー



カップまたはワイングラスを掲げて乾杯しましたが、わたしは代わりに水やミルクを飲みました。

北朝鮮での職務を終え、わたしたちは中国経由でスイスに向かい、ジュネーブに到着しました。ザイルをたつ前に教会の指導者から、ジュネーブに着き次第リムリー兄弟という教会員に連絡するよう勧められました。わたしは、翌日リムリー兄弟と会い、一緒にスイス神殿に行こうと計画しました。ところが、上司からスイスの別の町ローザンヌに同行するよう言われたのです。わたしは、翌日は非常に重要な約束があるので同行できないと説明しましたが、彼はあくまでもローザンヌ行きを主張しました。

わたしは自室に戻り、ひそかに祈りました。それから間もなく、上司の心は変わり、わたしはローザンヌへ行かなくてもよいようになりました。

次の日、ベルンに行ってスイス神殿でリムリー兄弟と落ち合ったとき、どれほど謙遜<sup>けんそん</sup>さと感謝の気持ちに満たされたことでしょうか。わたしは建物の美しさと荘厳さに心を動かされました。神殿で働く方々は、わたしの訪問を事前に知り歓迎してくれました。そこではほんとうにくつろぐことができました。マリオ・V・パイラ神殿長夫妻の愛ある言葉は決して忘れることができないでしょう。その日、わたしはエンダウメントを受けました。それはこれまでの人生で最も尊<sup>たか</sup>い賜物<sup>たまもの</sup>となっています。妻と二人の息子を神殿に連れて行ける日が来るように祈っています。また、この世を去った三男の息子と結び固められることも心から願っています。

この教会は神のまことの教会です。今日、わたしたちには生ける預言者が与えられています。常にその教えに耳を傾けることができますように。自分が神殿に行けるとは思ってもいませんでしたが、預言者の勧告に従って神殿推薦状を得ました。そして天の御父は、わたしが神殿の祝福にあずかれるように特別な方法を備えてくださったのです。□





# 召しにこたえる

1856年、4人の若者が恐ろしい死の川に勇敢に立ち向かいました。そして、1997年の今、皆さんはそれよりもはるかに危険な誘惑の洪水に直面しています。

七十人会長会および中央若い男性会長 ジャック・H・ゴーズリンド



THE MARTIN HANDCART COMPANY RESCUED BY VOLUNTEERS, BY CLARK KELLEY PRICE

**18**46年から、ユタ州に鉄道が通じる1869年にかけて、多くの教会員がソルトレーク盆地を目指して草原を横断しました。彼らは幌馬車と自分たちの足で進みました。1856年から1860年にかけては、多くの人が荷物を積んだ小さな手車を押したり引いたりしながら旅をしました。それは長く

厳しい旅で、ソルトレーク盆地へ着いたときも聖徒たちは疲労、病気、飢えに苦しんでいました。途中で東へ引き返した人たちもいます。そして、残念なことに道半ばにして亡くなった人も数多くいるのです。

1856年10月の総大会開催中にウィリー一隊とマーティン隊の窮状を知らせる

報告が入りました。この二つの隊は出発の時期が遅れて、ワイオミングの高地でいつもより早く訪れた冬の嵐に襲われてしまったのです。プリガム・ヤング大管長は総大会を休会として、強壮な男性を募り、急いで援助物資を集め、救援隊を組織しました。進退窮まった聖徒たちを助けるためにソルトレ

ーク・シティーを出発した多くの勇敢な人々の中に、C・アレン・ハンティントン、ジョージ・W・グラント、デビッド・P・キンボール、スティーブン・W・テラーという4人の若い男性がいました。出発するときの彼らは、自分たちが王国建設のために何を求められ、実際にどのような働きをすることになるのか知る由もありませんでした。

救援隊がスイートウォーター川の岸辺に着いたとき、手車隊の人々は50センチ近くも降り積もった雪の中でまったく身動きが取れない状況にありまし

た。隊員たちは男性も女性も子供たちもとても弱っていて、目の前の川を渡れる状態ではありませんでした。精力を使い果たし、何の力も残っていませんでした。凍傷や極端な体温の低下、それに過労の結果であることは明らかでした。

このとき、4人の強い若い男性たちが、普通ならとても考えられない求めに応じて犠牲を払ったのです。4人は遭難した隊員たちを運ぶために、何度も何度も氷の浮かぶ川を渡りました。川を何度も行ったり来たりした後で、

皆無事に対岸に移動し、そこから避難所へ向かい、最後はソルトレイク盆地にたどり着きました。しかし、厳しい寒さの中水に浸かりながら働いた結果自分たちが病気になってしまった4人の若い男性はその日、天に召され、英

**アロン神権を持つ現代の若い男性は、勇敢で、力があり、人々の生活に祝福をもたらすために喜んで自分をささげます。**



雄の列に加えられたのでした。彼らは完全な人間ではありませんでした。欠点や短所を持ち、それぞれに問題や恐れ、弱さのあるごく普通の若い男性だったと思います。しかし、彼らは預言者の召しにこたえ、人のために働くことを求められたときに、主の目が注がれていたその場所で働いたのです。

### 同じように立派な現代の若い男性

わたしは、アロン神権を持つ現代の若い男性の皆さんも、同じように、勇

敢で、力があり、人々の生活に祝福をもたらすために喜んで自分をささげる、と信じています。皆さんが生きているこの時代においては、C・アレン・ハンティントン、ジョージ・W・グラント、デビッド・P・キンボール、スティーブン・W・テラーが払ったような犠牲が求められることはあまりありません。皆さんに求められている犠牲はそれとは違う種類のものです。それでも、現代の執事、教師、祭司は、手車隊の生存者を運ぶために冷たい川を渡った若い男性たちよりもはるかに危険なチャレンジに直面していると思います。

現代の若い男性は、過去の世代が経験したことのない激しい攻撃に直面し、この世的な誘惑に耐える力を試されています。皆さんは毎日、現代社会では何をしてもかまわないという考えを、巧妙にあるいは大胆に信じさせようとする映画、テレビ、ラジオ、ビデオ、音楽、ファッション、雑誌、書籍、そして新聞などの攻撃を受けています。それは黒を白、悪を善と信じ込ませようとする偽りです。彼らが説いているのは、「もはや標準などは存在しない」「あなたのすることを気にする人などだれもない」「あなたが責任を持つべき相手はあなた自身だけ」という考えです。

これらの攻撃は、その危険さにおいて、1856年の勇敢な若い男性たちが眼前にした氷の川と何ら変わることがありません。彼らはその川には死の危険があるということを思いながら、手車隊の救助に当りました。今皆さんが直面している試練や誘惑も、霊の死をもたらす危険があるものとして、十分に注意しなければなりません。霊の死は、わたしたちが心の痛み、思いやり、兄

弟愛、また、健全さや向上心を感じられなくなったときにやって来ます。それらはわたしたちが進歩成長し、救い主イエス・キリストに近づけるように助けてくれる特質なのです。

またこれらの大きな誘惑は、多くの若人から、結婚して子供をもうけたり、家庭にあって義にかなって愛にあふれた導き手になったりする機会を奪ってしまいます。そして、主の権能による結婚を通して永遠に結ばれ、神殿の儀式を大切に守ることによって得られる数々の祝福にあずかり、夫婦としての喜びと幸福を味わう機会も危うくしてしまいます。

不道徳と性的な罪は多くの若人を、専任宣教師になって、イエス・キリストの福音の真理を求めている人々を見いだすために主に仕えるという素晴らしい体験をする機会から遠ざけます。そのような罪のある生活をしていると、神権の聖任を受けるにふさわしい生活をすることや、人のために神権の力を用いること、これが地上における神の業であるという聖霊からの確信を受けることなどが、それほど大切に思えなくなってきます。

### 悪い影響力に打ち勝つ

それではどうしたら、現代の社会を支配しているこれらの強力かつ否定的な影響力に打ち勝つことができるでしょうか。ほかの重要な価値の場合と同じように、それらの力に勝つためには、努力が必要です。それは決して難しいことではありません。しかしいつもそうであるとは限りません。いつもうまくいくとも限りません。誘惑との闘いを容易に行う人もいるでしょうし、もっと苦勞する人もいるでしょう。いか

PHOTOGRAPH BY STEVE BUNDERSON

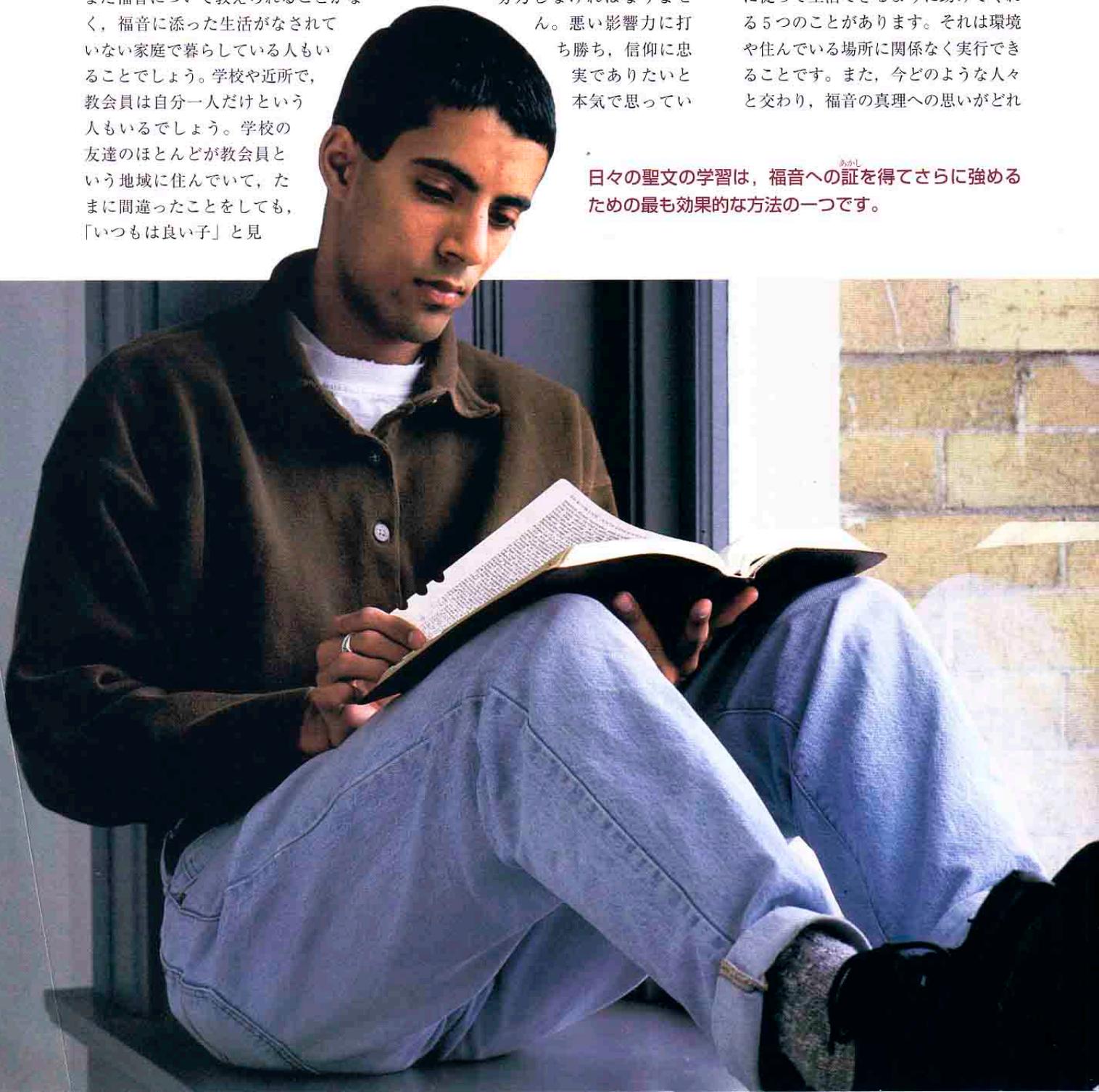
がわしい映画や本を勧めたり、あらゆる種類の不道德な行いに誘ったりする友達を持っている人もいます。また福音について教えられることがなく、福音に添った生活がなされていない家庭で暮らしている人もいます。学校や近所で、教会員は自分一人だけという人もいます。学校の友達のほとんどが教会員という地域に住んでいて、たまに間違っただけをしても、「いつもは良い子」と見

られているために、あまり問題にならないという人もいます。

前に述べたように、誘惑と闘うには努力しなければなりません。悪い影響力に打ち勝ち、信仰に忠実でありたいと本気で思ってい

る皆さんに、助けになることを幾つか分かち合いたいと思います。イエス・キリストの教えを学び、理解し、福音に従って生活できるように助けてくれる5つのことがあります。それは環境や住んでいる場所に関係なく実行できることです。また、今のような人々と交わり、福音の真理への思いがどれ

日々の聖文の学習は、福音への証<sup>あかし</sup>を得てさらに強めるための最も効果的な方法の一つです。



ほどのものかということにかかわりなく、だれでも実行できることです。わたしはこの5つのことから助けを得ていますし、ほかの多くの人も同じ力を得ています。そしてわたしは、それが皆さんの役に立つと知っています。

最初の1つは、1日を祈りで始め、祈りで終わるということです。今日から、朝と夜に必ず祈るようにするという人には、それが日々の生活の中で力となり、大きな慰めと祝福をもたらし、初等協会や日曜学校、アロン神権定員会で学んできたことを守り通す力を強

めてくれると約束します。

第2は、日々人のために行う奉仕は、その相手の人が必要としている助けを与えるとともに、奉仕する人自身にも物事を全体的に見通す力を与えるということです。ほかの人が何を必要としているかを見極め、それを満たすための方法を考え、行うのは人生をほんとうに充実したものにしてくれます。若いうちにその能力を養い、人のために働きたいという強い望みを持つなら、自分自身とそしてほかの人々の生活にいつまでも幸福をもたらすようになるでしょう。

第3は、福音の真理に厳格に従うなら、福音の中にあつて学び、成長し、天の御父の約束された祝福を受けられるようになるということです。ジョセフ・スミスは、教義と聖約第130章21節の中で、すべての祝福は神から授けられた律法に従うことによって得られると教えています。毎日が、自分の従順さを評価し、明日に向けてもっと従順になろうと決意をする機会です。イエス・キリストと父なる神を愛し、与えられた戒めに従う人々は、約束の祝福を授けられることでしょう。

第4は、わたしたちはだれでも、神が生きておられること、またイエス・キリストが神の御子であられること、そして神の業の目的が神のもとへの道を見いだし、永遠に神とともに住まえるようにわたしたちを助けることであることを、自分で学び、理解しなければならぬということです。祈り、聖文を学習し、また福音の真理について深く考え、神の律法を理解し実践しようと努め、日々神を念頭に置くことにより、わたしたちは、神が実在の御方であり、自分はその子供であるという信仰と知識を再確認できます。わたし

たちはこれまで、借りものの光では堪えられない時が来る、したがって、神とイエス・キリストが生きておられ、わたしたちを愛し、最も大きな喜びを得させたいとお望みであるという確かな知識を自分自身で得なければならない、と教えられてきました。その知識を得るには、神への証を持たなければなりません。

第5は、聖文の学習は、福音への証を得てさらに強めるための最も効果的な方法の一つであるということです。まだ納得していない人もいますが、わたしたちが毎日直面するすべての問題は、聖文の中にすでにその答えが示されています。それらの答えは、問題をどう解決すればよいかの直接的な模範、あるいは日々の聖文の学習によって得られる靈感や導きを通して授けられます。このことをぜひ自分自身の生活の中で試してください。若いうちから聖文を読むことを毎日の習慣とするなら知恵と理解、霊性、人への思いやり、充実した生活という祝福を生涯にわたって刈り取ることができます。

#### 問題に立ち向かう力を得る

若い兄弟たちに申し上げます。わたしたちは皆さんを愛しています。わたしは皆さんの親、神権指導者、教師、そして皆さんが信頼を置いている方々とともに、皆さんが最も偉大な、最高の報いを得られるように望んでいます。その報いとは、家族とともに神とイエス・キリストのもとに帰り、永遠にその御前で暮らすことです。神が皆さんを祝福し、強め、将来に待ち受ける様々な問題に立ち向かう力を授けてくださいますように。□

# ノーブーの ティーンエイジャー、 ヘンリー・ サンダーソン

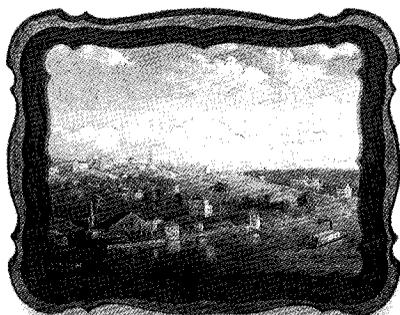


ウィリアム・G・ハートリー

**13** 歳になるヘンリー・サンダーソンは、コネチカット州からイリノイ州ノーブーに向かう旅の途中で、自分が鉄道を走る列車に乗っているのか、車輪付きのボートに乗っているのか分からなくなりました。

1842年9月のことです。ペンシルベニアの森は赤や黄色に染まりかけていました。ヘンリーは両親と二人の妹とともに、アルゲーニ台地を越える列車に乗り込みました。客車をけん引していたのは、蒸気で走る普通の汽車でしたが、客車はボートになっていて、下に車輪が付いていました。列車が台地の頂上に近づくと、機関士はけん引車を外し、客車をケーブルにつなぎます。ケーブルが巻き上げられて客車が台地のいちばん高い所に着くと、機関士はケーブルを外しました。すると客車はエンジンの力をまったく借りずに台地の反対側の斜面を滑り降りて行きました。そしてヘンリーの最後の冒険が始まります。そうです。車輪の外されたボートが運河に浮かぶのです。そのボートは運河沿いの引き船道を行く馬によってペンシルベニア州ピッツバーグまで引かれて行きました。

ヘンリーはピッツバーグでの滞在が一冬だけの短いものであるのを知っていました。両親であるジェームズとメアリー・ジェーンが数か月前に末日聖徒イエス・キリスト教会に加わり、皆でノーブーに行くところなのです。



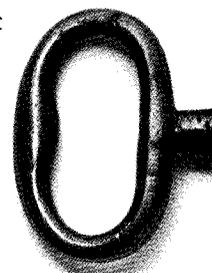
ヘンリーはこの引っ越しをうれしく思っていました。前に住んでいたコネチカットのノーウォークでは、両親がバプテスマを受けたことで近所の男の子たちからいじめられていたからです。ヘンリーは、ピッツバーグでは父親の靴を作る仕事を手伝いました。靴作り

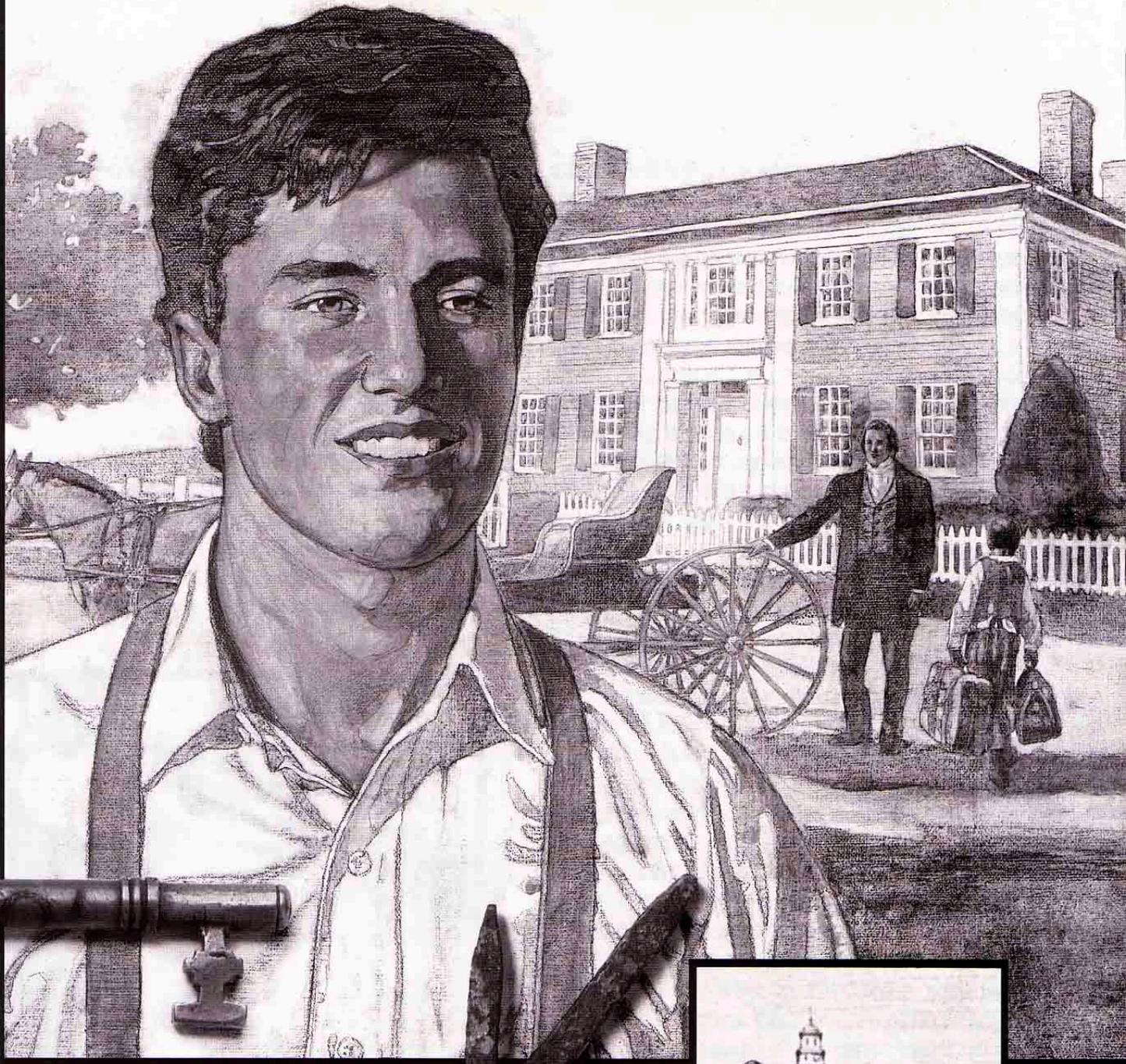
の仕事は父親から教わったのです。

次の年の晩春、サンダーソン家は蒸気船に乗ってオハイオ川を下り、ミシシッピ川に出ました。そして1843年の夏にノーブーに着きます。ヘンリーは14歳、ノーブーの町は入植後まだ4年しかたっていませんでした。ノーブーには新しい建物がたくさん建っていましたが、そのほとんどが小さな木造の家で、大きなれんがの家は点々と見られる程度でした。そして町の西側を囲むようにしてミシシッピ川の三日月形の湾曲部が広がっています。

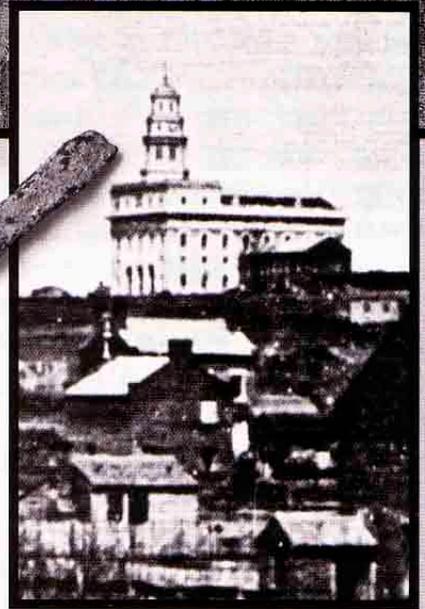
ノーブーに着くと、ヘンリーは丘に登り、神殿用地を訪れました。そして、60センチの高さの囲いの外を回りながら、神殿の建物が空に向かって建っていく様子を眺めました。また、2階が教会の本部になっているれんが造りの店にも入ってみました。メインストリートには、れんが造りの郵便局とメリウェザーの店もありました。

サンダーソン家はメインストリート沿いの、川から2ブロック目、ジョセフ・スミスの家隣の隣です。反対側の





少年ヘンリー・サンダーソンはイリノイ州ノーブーで、ジョセフ・スミスの隣人として預言者の息子たちと遊んだ。彼は父親とともに10日ごとにノーブー神殿建設のために働くことにより、什分の<sup>しゅうぶん</sup>一をささげた。



隣はシドニー・リグドンの家でした。ヘンリーの両親は、ジョセフ・スミスの新しい家であるマンションハウスとシドニー・リグドンの家の間の丸木の家に住むことにしたのです。ヘンリーは職人たちがマンションハウスの最後の仕上げをするのを眺めました。スミス家はそこをホテルとして9月に開店する予定でした。

ヘンリーは預言者ジョセフの息子たちと遊びました。いちばん上の子がジョセフ・スミス3世で、ヘンリーより3歳年下です。ヘンリーはシドニー・リグドンの同年代の息子、アルジャンとジョン・Wの親友になりました。

ノーブーでは、男は子供も含めて、10日ごとに建築プロジェクトに参加することにより<sup>じゆうぶん</sup>の一分をささげることになっていました。「わたしは父と一緒に10日ごとに神殿に行き、作業をした。」ヘンリーはそう書いています。「石切り場で作業することもあれば、神殿用地での仕事のこともあった。」

預言者ジョセフと知り合いで預言者が大好きだったヘンリーはこう書いています。「よく預言者の家に行って子供たちと遊んだ。預言者が一緒になって遊んでくれることもあった。ボールでゲームをしたときも、預言者が加わりました。」

ジョセフ・スミスがカーセージに向かってノーブーを去るとき、ヘンリーは預言者の家の外にいました。15歳のときのことです。ヘンリーはジョセフが見知らぬ人と握手を交わし、杖を交換しているのを目撃しています。そしてジョセフは、馬にまたがって行ってしまいました。ヘンリーが生きている預言者を見たのはそれが最後でした。やがてヘンリーはカーセージの監獄からの悲しい知らせを聞くことになります。「だれかが『預言者が殺された』と叫びながら、家の前を走って行った。」

それから1、2日後、ヘンリーはほかの大勢の人々とともにマンションハウスを訪れました。「そこでわたしはカーセージから運び込まれた彼らの遺体を見た。」ヘンリーはそう書いています。「彼らの殉教はわたしの父にとって悲痛な出来事であった。数日の間、父はこれからどうなるか分からず途方に暮れている様子だった。しかし、やがて父は、教会は発展を続け、十二使徒が正当の指導者になるとの確信を得た。」

収入が必要だったヘンリーと父親は、川下のミズーリ州セントルイスに職探しに行きました。そして父親はジョージ・ベッツの靴店に雇われます。従業員が25人いる店でした。ヘンリーの方は3人の末日聖徒の靴職人が勤める小さな靴店で働くことになりました。その年の春には母親や妹たちもセントルイスに呼び寄せています。

あるとき、ヘンリーの親友であるリグドン家の息子たち、アルジャンとジョンがヘンリーを訪ねてやって来ました。ジョセフ・スミスの副管長であった父親が教会を去ることを決意したため、ペンシルベニア州ピッツバーグに行くのだそうです。ヘンリーはこう書いています。「さようならを言う最後の会話の中で、二人はいつか必ず教会に戻るからと言ってくれた。……彼らはまじめな子たちだったから何か知らせがあるだろうと何年も待ったが、何も言って来なかった。」(ジョン・リグドンは亡くなる直前の1904年、教会に再加入している。)

靴店のベッツ氏は前年のミシシッピ川の洪水に見舞われた農場を復興するため、ヘンリーの父親を派遣しました。そこでヘンリーは家族全員でその農場に移り、「大変立派な丸木の家」に住みました。そして土地を耕し、種をまき、すばらしい実りを迎えます。ところが夏の暑さのせいでしょうか。河川流域に広がった伝染病(恐らくマ

ヘンリーは家計を助けるために靴屋の仕事に身を付けた。後に彼はプリガム・ヤング(右ページ下)からの500人の志願兵の求めに応じ、モルモン大隊に加わった。



ラリア)が家族を襲いました。そして病状の最も重かった父親が、1845年9月16日に亡くなりました。41歳でした。

16歳になったヘンリーは母親と4歳の下の子メアリー・ジェーンとともにノーブーに戻ります。上の妹マリアは残ってベッツ家族のために働くことになりました。

しばらくして、まだ体が完全に快復していなかったヘンリーは、妹を連れにセントルイスにやってきました。船の切符は片道だけ買って、帰りの船賃は船で働いて捻出するつもりでした。セントルイスへの便では機関助手の仕事をしました。燃料の運搬や荷物の積み下ろしの仕事です。

ノーブーへの帰りの便では3等調理士として働きました。こう書いています。「キャビンボーイが客室から下げてきた食器を洗う仕事だった。」ヘンリーはこの仕事が好きでした。残り物にありつけたからです。それは普段食べているものより上等なものでした。また手つかずで戻される皿もありました。規則では川に捨てることに

なっていました。ヘンリーはキャビンボーイによく食べさせました。

年のわりには体の大きかったヘンリーは、ノーブー軍団に入りました。彼は「ブラック隊長の隊」に登録されています。ノーブーの内外でモルモンに対して敵意を持った隣人たちが聖徒たちを悩ませ始めていたころのことです。将校たちはまだ10代のヘンリーに銃を与え、ヘンリーは夜通し見張りに立つこともありました。ヘンリーは暴徒がいつ襲ってくるか分からないような緊迫した中でも、喜んでこの任務を果たしました。

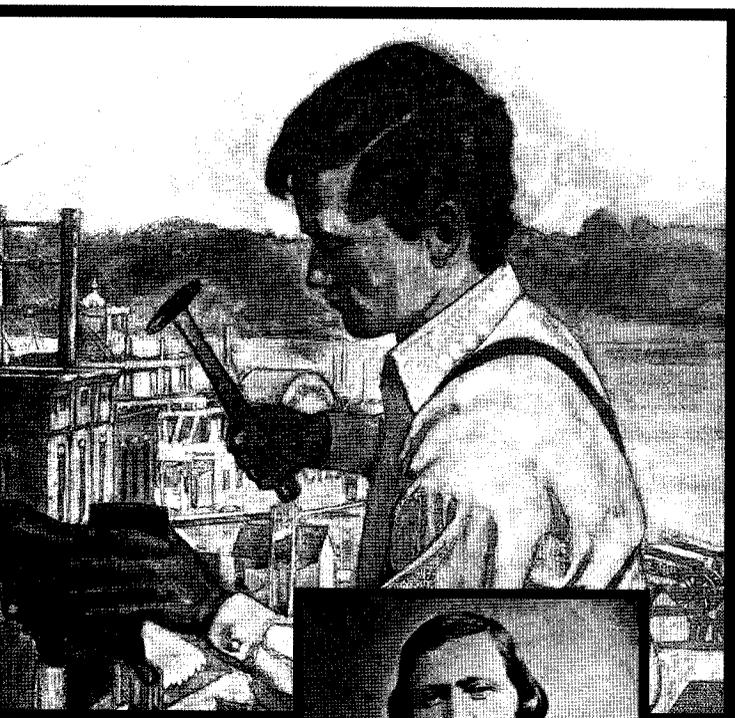
1846年の初め、ヘンリーが17歳のときに聖徒たちはノーブーを追われました。アイオワへの幌馬車での旅のために、ヘンリーはジョナサン・C・ライトから雑用係として雇われます。そして御者として働きました。ヘンリーはこの仕事も好きでした。でも一つだけ嫌なことは、ライト氏から馬は歩かせるだけで、走らせたり競走をさせたりしてはならないと言われたことでした。

ヘンリーがライト家族とアイオワ州カウンスルブラフスで野営をしていたとき、合衆国陸軍の新兵募集係がやって来ました。ヘンリーはこう記しています。「わたしは仲間に、彼は一人も応募が得られないだろうと言った。」ところがブリガム・ヤングが草ぶきのあずま屋で集会を開き、メキシコ戦争のために500人から成るモルモン大隊を募ることを発表しました。ヘンリーはその召しにこたえるべきだと思い、陸軍に加わります。ライト氏は働き手を失って憤慨しました。ヘンリーはこう書いています。「(ライト氏は)怒りを表にし、行かせないと言った。」しかしヘンリーは行きました。政府の基準である18歳には達していませんでしたが、大丈夫でした。「背はもうほとんど伸び切っていたので、難なく合格できた。」

翌年の夏、18歳になった彼はモルモン大隊の行軍の終了とともにカリフォルニアを離れ、グレート・ソルトレーク盆地に入ります。1847年の開拓者が到着した直後のことです。そしてヘンリーは家族との再会を願い、その年遅くブリガム・ヤングの隊とともにウィンタークォーターズに向かいました。

3年後の1850年、ヘンリーは家族とともに西部への旅路をたどります。その後結婚して、ユタ州のフィルモアのユニオンフォートやフェアビューで生活しました。成人してからは農業を営むとともに、教師や靴屋としても働きました。□

この記事はユタ州ソルトレーク・シティにある末日聖徒イエス・キリスト教会記録保管課所蔵「ヘンリー・ウィークス・サンダーソン自伝」を基に書かれました。



ILLUSTRATED BY ROBERT T. BARRETT





# 心に留めますか、 それとも 無視しますか

初期の末日聖徒が経験した事柄から、  
わたしたちは現在の選択の結果が  
今後の人生全体に影響を与えることを  
学ぶことができます。

デール・S・コックス

「**警**告の声は、……すべての民に及ぶ。」「預言者たちや使徒たちの言葉〔を〕心に留めようとしない者たちが、民の中から絶たれる……。」教義と聖約第1章に記されているこの教えは、この聖典全体を貫く概念となっています。

生きていて、実りをもたらす木につながっている枯れた枝を取り除く、この剪定と呼ばれる作業には隠喩が含まれています。枯れた枝と肥えた枝の違いを考えてみれば、このたとえは的を得ています。ところで、回復された福音を受け入れた人は常に選択をする必

十二使徒定員会の忠実な会員であったブリガム・ヤングは定員会会長のトーマス・B・マーシュに対して、預言者ジョセフの言葉に心を留めるようしばしば忠告を与えた。しかしマーシュは自分の考えに固執したため、王国における自らの地位を失うことになった。



ILLUSTRATED BY ROBERT A. MCKAY

要があります。主の僕たちの声に耳を傾けるか、それとも耳を傾けないか、つまり木につながって生きるか、それとも投げ捨てられて一人になって死滅してしまうかの選択です。この警告は『教義と聖約』全体に見ることができます。主の言葉を受け入れて、『教義と聖約』の中にその名を記されていますが、今日ではほとんど知られていない聖徒たちの生涯を調べてみると、興味深い対照が浮かび上がってきます。多くの聖徒は福音を心に留め、教会とのつながりを持ち続け、そして実を結ばせました。しかし、福音を心に留め

ず、切り落とされた聖徒もいました。彼らを選択した経緯を調べてみると、学ぶべき事柄がたくさんあります。

『教義と聖約』にその名を記されていて現在は比較的忘れられている人々の生涯に興味を持つようになったのは、わたしから数えて4代前の曾祖父(6代前の先祖)であるライマン・シャーマンがそうした人の一人だったことを知ったときからです。ライマンは1835年に、指示を受けるために預言者ジョセフ・スミスのもとへやって来ました。ジョセフ・スミスはその要請の答えとして、教義と聖約第108章を受

けました。短い啓示ですが、奉仕の業に携わろうとする者にとっては大切な教えが含まれています。ライマンは後に七十人会長会の一人に召されました。彼は使徒職の召しを告げる言葉が届く前に、ミズーリ州における迫害がもとで亡くなりました。わたしの家族は『教義と聖約』とこのようなかわりを持っていたため、『教義と聖約』に登場するほかの人々にも興味を持つようになったのです。

『教義と聖約』に記された129人の生涯は、彼らの個人の生きざまと、彼らが預言者の声に聞き従うことをどれ

ほど大切にされたか、のいずれの側面から調べても興味深いものがあります。

例えば、『教義と聖約』には、十二使徒定員会の初代会長であったトーマス・B・マーシュに対して与えられた指示が6つの章に記されています。マーシュは「教会員にとっての医者となる」(教義と聖約31:10)べき人であると告げられ、全世界に福音を宣べ伝えるという十二使徒会の使命を果たすために彼らを導くという大きな責任を与えられていました。彼は教会を擁護するために多くのことを堪え忍びました。けれども結局、高慢な心を抑え切れずに、当時のあつれきや争いの中で教会を捨ててしまいました。

トーマス・B・マーシュと対照的だったのは定員会の前任順では下位にあったブリガム・ヤングでした。ブリガム・ヤングは幾度か、預言者の言葉に心を留めるようこの短気な会長をいさめています。あるときブリガム・ヤングは、十二使徒会が人々の注目を引くような機会を与えられていないことを気にしていたマーシュ会長に対して、「わたしたちは忠実であれば、いつか、……すべての力を得て、神の御前においてそれをどのように使うべきかを知らされるでしょう」<sup>2</sup>と述べています。別の折に、ジョセフ・スミスが下した決定に不満を漏らしたマーシュ会長は、ブリガム・ヤングから次のような勧告を受けたことを自ら記録に残しています。『「トーマス兄弟、あなたが教会を導いているのですか。』わたしは『そうではありません』と答えた。すると彼は『であれば、決定についてあれこれ言うのをおやめになったらいかがですか。』<sup>3</sup>

しかし、トーマス・マーシュは口出しするのをやめられませんでした。神権という建物を構成する一つ一つの石が正しく並べ換えられる調整と試しのときに、彼は主の言葉に心を留めるのをやめました。その結果、王国における地位を失ってしまいました。これと

は逆に、ブリガム・ヤングは決して迷うことなく信仰を貫きました。そして、王国の偉大な建設者、福音の伝道者となったのです。それはまさにトーマス・B・マーシュが熱心に求めていたものでした。

トーマス・B・マーシュは背教後、長い年月を経て、教会に戻ることを許してほしいという気持ちを教会員の前で切々と訴えました。彼自身の言葉の中から、教会から切り離されることがどれほどの苦痛と損失を招くかを知ることができます。「わたしは自分が何をしたかを知っています。わたしは使命を与えられましたが、それを果たしませんでした。そのことに気づくのが遅すぎました。わたしに代わって別の人がその使命を果たしています。主はわたしがいなくても十分にやってくること、わたしが教会を去ることが主にとっては何の損失でもないことを知りました。それに比べてわたしが失ったものはこの上なく大きいものでした。』<sup>4</sup>

トーマス・B・マーシュは最終的に教会員の資格を再び得ることができました。けれども、失った機会を取り戻すことはできませんでした。

自尊心が災いして、教会にとどまることを選ぶのではなく、迷い出ることを選んでしまった人々の話はほかにもあります。教義と聖約第52章に登場するサイモンズ・ライダーは教会が組織されて間もなく教会に加わりました。それから幾らも時を経ないうちに彼は背教しました。そして、ついには冬の寒い日に暴徒を先導してジョセフ・スミスとシドニー・リグドンを力づくで家から連れ出し、二人に暴行を加え、熱いタールを浴びせるような暴挙を行ったのです。<sup>5</sup>ライダーが教会を去ったのは、教会の文書に記された彼の名前のつづりが間違っていたためでした。ライダーは神聖な文書であればつづりの間違いなど起こるはずがないと考えて、教会の資料に対して疑問を抱

くようになったのが発端でした。<sup>6</sup>

教義と聖約第50章と第52章に名前が登場するジョセフ・ウェイクフィールドも同じような理由から、預言者の言葉に耳をふさぎました。彼は『聖書』の翻訳の仕事を終えたジョセフ・スミスが子供たちと遊んでいるのを目にして、預言者たる者がそのようなことをするはずがないと考えました。<sup>7</sup>ライダーと同様にウェイクフィールドも教会を去り、彼の名前は二度と記録に現れませんでした。

第124章に名前が記されているアルモン・パビットはノーブー時代の教会の著名な指導者で、ステーク会長と教会の法律顧問を務めました。パビッド兄弟は名声を博し、才能に恵まれていたにもかかわらず、着実な歩みを続けることができずして、彼は教会に活発だったり、そうでなかったりの生活を何度も繰り返しました。<sup>8</sup>

このほかに、第55章を受けたウィリアム・W・フェルプスも教会を離れましたが、後に教会に戻って、王国のために貢献しました。フェルプス兄弟が加担したミズーリでの迫害によって、預言者は危うく一命を落とすところでした。フェルプス兄弟は自分がどのようなことをしたかを承知していたため、ジョセフ・スミスに対して熱心に和解を願い出しました。その結果、悔い改めと赦しの力が発揮されました。これは教会を迷い出た人々に対する一つの模範です。自分の非を悔いたウィリアムは預言者に、赦しを求め、再び聖徒たちと交わることを許してくれるようお願い求めました。そしてジョセフは気軽に、また寛大な心でその両方を認めました。<sup>9</sup>

道を踏み外した人々の物語はたくさんあります。しかし、道を踏み外さなかった静かな英雄たちの物語も少なくともそれと同じ数だけはあります。『教義と聖約』にその名を記されてはいませんが、預言者にきわめて忠実だった家族の母親であるポリー・ナイト

はミズーリで亡くなった最初の末日聖徒となり、教会歴史にその名をとどめることになりました。ミズーリに定着するため旅を続けていたポリーは、途中で病状が悪化しました。このとき川を渡るために舟に乗っていた息子のニューエルが舟を降りて母親のひつぎを作るための材木を買いに行かされたほど、事態は深刻でした。しかしポリーは最後まで旅を続けると言い張って、ついにミズーリの集合の地に着きましたが、間もなく息を引き取りました。

ミズーリで妻を埋葬したジョセフ・ナイトはこのように記録しています。「わたしたちは森の中に場所を見つけて妻を埋葬した。それから数日後に、

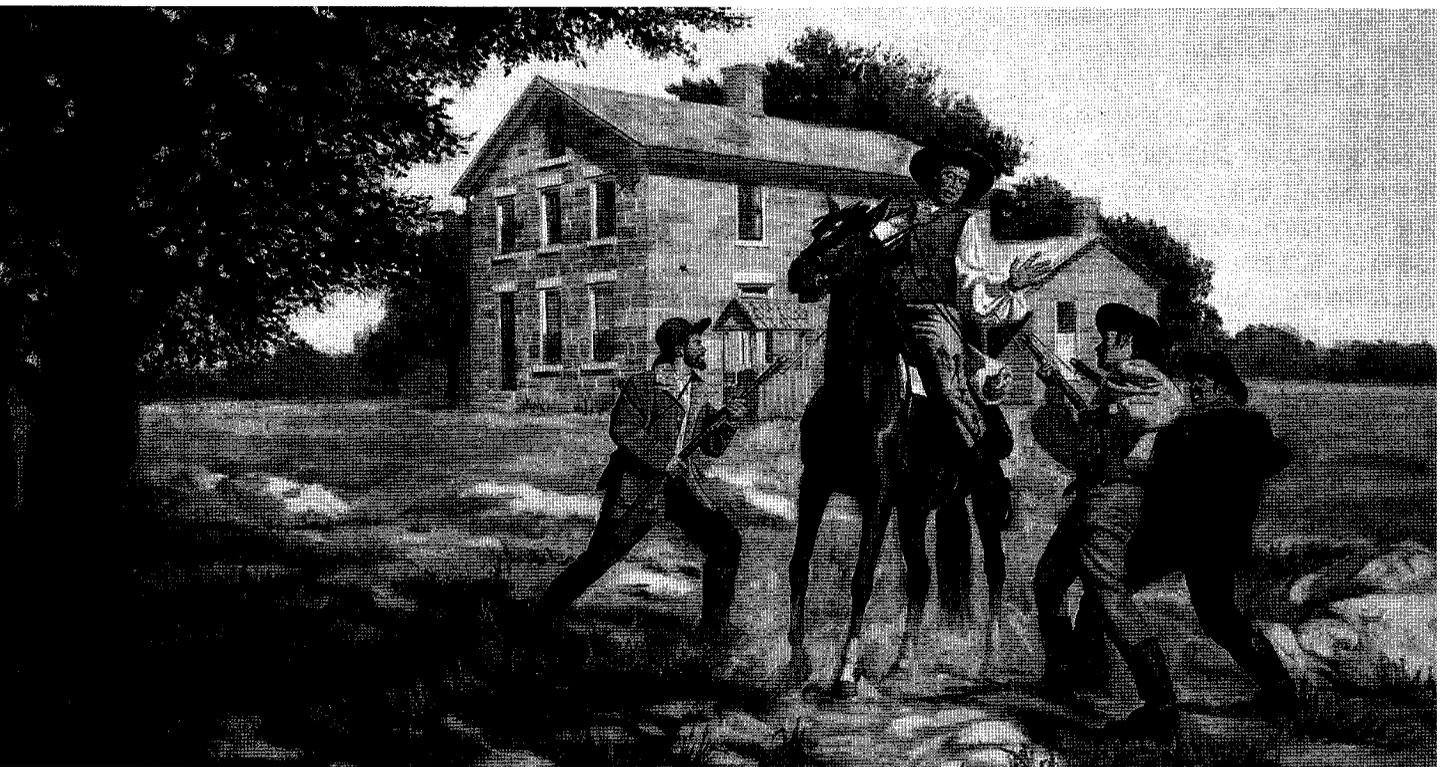
スティーブン・マーカムはカーセージの監獄に捕らわれていたジョセフ・スミスを訪れようとしたが、不法な謀略をたくらんでいた護衛に押し戻された。マーカムは護衛たちに銃剣でひどく突き刺されたために、ブーツからあふれるほどの血を流した。

埋葬した場所を訪れてみると、墓の周囲が掘り返されていた。野生の豚の仕業だ。そのころのわたしは、体の具合が芳しくなかったが、翌日、斧を手にして墓地へ行き、墓の周囲に小さなさくを巡らした。これが妻のためにしてやれた最後の仕事だった。」<sup>10</sup>主は彼女が信仰ゆえにささげた犠牲を心に留められました。ポリー・ナイトが亡くなってから間もなくして、主はジョセフ・スミスにこのように言われました。「死ぬ者はその労苦をすべて解かれて休み、彼らの業は彼らについて行くからである。そして、彼らは、わたしが彼らのために用意した父の住まいで冠を受けるであろう。」(教義と聖約59:2)

大声を上げて周囲の注目を集めなくとも、忠実であるがゆえに人々の間でその名を知られるようになった人もいます。そのような人々の中に、教義と聖約第99章を受けたジョン・マードックの名を見いだすことができます。彼はこのように告げられました。「永遠

の福音を宣言する……また、数年の後、あなたがわたしに願うならば、あなたも良い土地の上って行って受け継ぎを得ることができる。」(教義と聖約99:1, 7) ジョン・マードックは実に6度にわたって伝道に召されました。彼がどれほど大きな犠牲を払ったかは、初期の聖徒たちの集合地であった、オハイオ州カートランド、ミズーリ州、イリノイ州においてそれぞれの地に妻を埋葬したという事実からうかがい知ることができます。<sup>11</sup> これらの犠牲は信仰をもって堪え忍んだジョン・マードックと妻たちの遺産と言うことができますでしょう。

『教義と聖約』の8つの章にその名を記録されている預言者の弟サミュエルは、ジョセフとハイラムが殉教した1か月後に亡くなって、カーセージにおける第3の殉教者となりました。サミュエルは兄たちを救出するために、大胆にもカーセージに向かって馬を走らせました。そして、暴徒に追いかけて、傷を負われました。この衝



突が原因で亡くなったのです。サミュエルが到着したときにはすでに兄たちは殺されていました。サミュエルは兄たちの遺体をノーブーに運んだ後、間もなく死亡しました。<sup>12</sup>

主の預言者の言葉に謙遜に聞き従った静かな英雄たちは、このほかにも『教義と聖約』の歴史の中にしっかりと足跡を残しています。ディミック・ハンティントンは、時には苦痛を強いられながらも力を尽くして預言者に忠実に仕え、預言者から大いに感謝された人でした。<sup>13</sup> ディミックの父親ウィリアムは、預言者の身代わりとなって預言者のベッドにもぐり込み、だまされたことを知った暴徒から狂ったように袋だたきにされました。<sup>14</sup>

スティーブン・マーカムも、忠誠を尽くした人々の感動あふれる物語に登場する人物の一人です。彼の名は預言者の生涯の後半に出てきて、その後預言者が命を脅かされたほとんどの場面で、預言者に付き添ったマーカムの名を目にすることができます。ジョセフがミズーリで投獄されたとき、スティーブン・マーカムはジョセフの家族をイリノイまで無事に連れて行くという任務を果たしています。<sup>15</sup> イリノイ州にいたジョセフがミズーリ州から来た二人の警官により不法に留置され、虐待されたとき、警官に公然と反抗し、人間として恥ずべき行為であると言って非難し、預言者がミズーリ州に拉致されるのを阻止したのは、スティーブン・マーカムでした。<sup>16</sup> カーセージで、預言者の服を自分の服と交換して、預言者を逃れさせたのもマーカム兄弟でした。<sup>17</sup> また、預言者が暗殺された日、マーカム兄弟はウィラード・リチャーズのために薬を手に入れて監獄へ戻ろうとしていました。ところが、護衛たちは不法な謀略をたくらんでいたため、銃剣を向けてマーカム兄弟が監獄に入るのを許さず、それでも預言者たちのもとへ戻ろうとする彼を強制的に退去させました。銃剣で突つかれなが

ら馬に乗せられたマーカム兄弟は、何度も銃剣で刺されたため、ブーツからあふれるほどの血を流しました。<sup>18</sup> ジョセフ・スミスの最後の日記には預言者の言葉が記されていますが、これはジョセフがスティーブン・マーカムに語ったものです。「もしわたしとハイラムが再び捕らえられるようなことがあれば、わたしたちは虐殺されることでしょう。」<sup>19</sup> マーカム兄弟が預言者を心から愛していたことは、この預言の成就を阻止しようとする勇敢な行動に表れています。

種まきのたとえに出てくる種のように、主と主の預言者の言葉は人々の心の上にまかれました。たとえの土のように、ある人々はそれらの言葉を心の中で育て、ほかの人々は育てようとしませんでした。わたしたちの歴史に登場する人々の生涯が語りかけているのはこのようなメッセージです。わたしたちも心に留めるか、無視するかを選択をしています。わたしたちはジョン・マードックが示した忠実さを模範にすることもできますし、アルモン・バビットが示したようなどっちつかずの態度をとることもできます。ブリガム・ヤングのように忍耐強く謙遜であることもできますし、トーマス・マーシュのようにおごり高ぶることもできます。サイモンズ・ライダーやジョセフ・ウェイクフィールドのようにささいなことで気分を害することもできますし、それらを超越して、サミュエル・スミス、ポリリー・ナイト、ハンティントン親子、スティーブン・マーカムのように忠実に仕えることもできます。たとえ道を踏み外しても、ウィリアム・W・フェルプスのように悔い改めることができます。

わたしたちは、心を留めて従うならば、過去の時代に忠実であった人々と同じように、いつまでも実りをもたらすことができます。もし、心を留めなければ、切り落とされて、根とのつながりがなくなるために枯れてしまいま

す。けれどもわたしたちは王国の実り豊かな木の一部となるための機会を選ばなければなりません。この木につながるかどうかはわたしたちの選択にかかっているのです。□

## 注

1. リンドン・W・クック, *The Revelations of the Prophet Joseph Smith* 『預言者ジョセフ・スミスが受けた啓示』 p.217
2. ロナルド・K・エスプリン "Thomas B. Marsh As President of the First Quorum of the Twelve 1835-1838" *Hearken, O Ye People* 『最初の十二使徒定員会会長を務めたトーマス・B・マーシュ, 1835-1838年』 『聴きなさい, おお, 人々よ』 p.173
3. 同上, p.184
4. 同上, p.185
5. ルーシー・マック・スミス, *History of Joseph Smith by His Mother* 『母がつづったジョセフ・スミスの生涯』 pp.219-220
6. クック, p.81
7. 同上, p.69
8. 同上, p.252
9. *History of the Church* 『教会歴史』 4: 162-164
10. クック, pp.93-94
11. 同上, p.80
12. スミス, pp.340-341
13. トルーマン・G・マドセン, *Joseph Smith the Prophet* 『預言者ジョセフ・スミス』 p.40
14. 同上
15. ドナ・ヒル, *Joseph Smith: The First Mormon* 『最初のモルモン, ジョセフ・スミス』 p.251
16. 同上, pp.325-328
17. マドセン, p.121
18. テッド・ギボンズ, *I Witnessed the Carthage Massacre* 『わたしはカーセージの虐殺を目撃した』 p.41
19. ジョン・ヘンリー・エバンズ, *Joseph Smith: An American Prophet* 『アメリカの預言者, ジョセフ・スミス』 p.198

## 「あなたの信仰があなたを救ったのです」



「ある人には、癒される信仰を持つことが許される。……ある人には、奇跡の働きが与えられる。」(教義と聖約46：19-21)

**あ**る日イエスは、群衆の中を歩いておられたとき、急に振り返ってこうお尋ねになりました。「わたしにさわったのは、だれか。」弟子たちはなぜそのような質問をされるのか不思議に思いました。群衆が取り囲んでいたのに、だれかが偶然、主におつかったとしても何の不思議もありませんでした。するとイエスは言われました。「だれかがわたしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ。」

主に触れた行為は、実際には信仰の行為でした。「長血」を患っていた女性が、主の衣に触れれば癒されると信じて、そうしたのです。そして、確かに癒されました。イエスは彼女を御覧になって言われました。「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」(ルカ8：43-48。マタイ9：20-22参照)

イエス・キリストに対する信仰と天父の御心によるこの癒しの賜物と同じ賜物が、身体的、精神的、霊的な病で苦しむわたしたちに、今日も与えられています。

### 主に対する信頼

ヤコブは病んでいる人にこう教えています。「教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を注いで祈

ってもらいがよい。信仰による祈りは、病んでいる人を救[う。]」(ヤコブの手紙5：14-15) 祝福を受ける人は、愛する人々と、儀式を行う神権者たちと信仰を一つにします。主は、「わたしによって癒されるという信仰を持っていて、死に定められていない者は、癒されるであろう」(教義と聖約42：48)と約束されています。

主イエス・キリストに対する信仰には、主に対する心からの信頼が含まれています。癌で苦しんでいたある若い姉妹は、十二使徒定員会会員のM・ラッセル・バラード長老に対してそのような信仰を表しました。「わたしは死を恐れていません。もちろん生きていたいのです。まだ人生でやりたいことがあるからです。でもイエスはわたしの救い主、贖い主です。この数年の間に、いちばん親しい友になりました。……主が望まれることが何であれ、備えはできています。」

バラード長老は彼女を祝福しましたが、彼女が求めたように、すべてを天父にゆだねました。それから間もなく、彼女は「家族の見守る中、主の安らぎのうちに亡くなりました。」(『聖徒の道』1996年7月号、p.93)

### 苦難から学ぶ

時折、忠実な聖徒は、苦難とともに

生き、苦難から学ぶときに、恐らく最も大きな癒しの奇跡が心の中で起きることを理解するようになります。例えば、スベンサー・W・キンボール大管長は、病気に対して忍耐強く、雄々しく立ち向かいました。使徒として奉仕していたとき、癌で声帯を大部分除去しなくてはなりません。しかし、その後何年もの間、主の代理人として、また使徒として、声を絞り出すようにしながら、世界中の人々に向けて証を述べたのです。

バラード長老はこのように述べています。「もしわたしたちの信仰がキリストに対する証にしっかりと錨を下ろしているならば、わたしたちの進む道にどのような艱難が訪れても、前向きに、信仰を高めるような方法で立ち向かえるようになります。わたしたちがいつも信仰の目をキリストに向けるならば、より広い物の見方と永遠の視野を持ち、天父がその子供たちのために作られた永遠の計画という視点に立って、艱難の意味を理解できるようになります。そして、主が約束されている永遠の安全、平安、喜びの中であって、現世においても慰めを見いだせるのです。」(Ensign『エンサイン』1996年12月号、p.61)

●艱難の中にあっても平安を得、主の御心を受け入れるにはどうしたらよいでしょうか。

●家族や隣人、友人の病の癒しに関して、わたしたちはどのように信仰を表せるでしょうか。□

# 群れに戻る

希望により匿名

ILLUSTRATED BY DOUG FAKKEL

ある日のことです。ワード書記の兄弟が電話でこう尋ねてきました。「火曜日の夜に監督がお会いしたいと言っていますが、いかがでしょうか。」監督が替わったことは近所の人から聞いていました。でも、何年も前に正会員資格を剥奪されて以来教会に行っていなかったわたしにとっては、どうでもよいことでした。新しい監督が会いたいということは、何かの責任に召したいというのでしょうか。でも、わたしの会員資格について説明したら、お互いにとても気まずい状態になるに違いないのです。しかし、断る気持ちにもなれず、監督にお会いすることにしました。

わたしは机を挟んで監督と向かい合って座りました。この人こそが、わたしの人生を永遠にわたって変えてくださることになるのです。監督はわたしを心から歓迎し、少し世間話をした後でわたしが教会についてどう感じているか尋ねてくださいました。わたしは教会に対する憎しみはないものの、何年も前か

ら正会員資格を剥奪された状態にあり、しかも罪を繰り返せば破門になると言われていました。わたしはそのことを監督に説明しました。きちんと悔い改めができていませんでしたから、わたしは自分でもう破門だと決めつけていたのです。

監督はこうおっしゃいました。「戒めに照らして今の生活がどんな状態かを話し合いたいと感じておられますか。」わたしはそのころにはもうすべてを話そうという気持ちになっていました。すべてを打ち明けました。涙が止まりませんでした。

話し終わると監督はただ一言、こうおっしゃいました。「教会に戻って来ていただけますか。」わたしは「はい」と答えました。

監督は宗紀評議会をもう一度開く必要があるかステーク会長に確認し、追ってまた連絡してくださるとのことでした。監督室を後にしたとき





のあの希望に満ちた思いは、なかなか言葉で表すことができません。『モルモン書』の次の聖句からその日の夜にわたしの心に起こった変化について理解できたのは、それから何か月も後のことでした。「もしあなたがたに希望がなければ、あなたがたは必ず絶望を味わうであろう。絶望は罪悪のために生じる。」(モロナイ10:22) わたしは希望を胸に満たして監督室を出ました。悔い改めて天の御父のふさわしい娘となり、いつの日か御父とともに生活するという希望でした。

監督との面接を終えたわたしは家に戻り、教会員でない夫に教会に戻ることを告げました。夫は承知してくれました。またこの知らせに、当時11歳の上の娘は小躍りして喜びました。彼女はふだん、独りで、あるいは祖父母と一緒に教会に集っていました。そして両親は、監督と話をし教会に戻れることになったというわたしの言葉を聞いて、電話口で泣いていました。二人は長い間この日が来るのを心待ちにしていたのでしょうか。

### 教会に戻る

教会に戻るに当たってのいちばんの心配は、ワードの会員がわたしにどう接してくださるかということでした。最初の日曜日はたまたまステーキ大会でした。何だか怖い気持ちがしましたし、4人の子供に教会に行く準備をさせるのに少々疲れてしまいました。

何席か隔てて近所の人が座っていました。知っている方のお顔が見えると安心するものです。開会の賛美歌は、75番「主は生けりと知る」でした。歌詞を追う目が涙でかすん

できました。そして、その後の靈感あふれる話や賛美歌の間中、涙が止まりませんでした。

集会の終わり近くになって一人の姉妹からメモを渡されました。メモに目をやろうとしたとき、2歳の娘がわたしのドレスのボタンを外してしまったことに気づきました。きっとそのことを注意してくださったのでしょうか。わたしは慌ててボタンをはめ直すと、「ほかに気づいた人はいなかったかしら」と思いました。ところがメモの中味は違っていました。わたしの子供たちが行儀がいいのに感心したこと、さぞかし善い両親に育てられたのだろうというものだったのです。そのメモのおかげで、わたしは気持ちが安らぐのを覚えました。自分は今、いるべき場所にて、皆が自分と子供たちを受け入れてくださっていると感じたのです。メモを渡してくださった姉妹がどなたなのかはいまだに分かりません。でも、その何げない思いやりを決して忘れることはないでしょう。

次の日曜は断食日でした。わたしはそっと教会堂に入っていくつもりでしたが、着くやいなやだれもが笑顔と思いやりの言葉でわたしたちを迎えてくださっているようでした。多くの人は歓迎の言葉を述べた後で、「初めて来られましたか」と尋ねてくださいました。聖餐会で、手渡されたパンのトレイをパンを取らずに次の人に送ると、3歳の子がほかの人にも聞こえるような声で「ママ、

11歳の娘が立って、母がビールを飲むのをやめて教会に戻って来てくれたのでうれしいです、と証をしました。目立たないようにと思っていたのに、これでもうおしまいです。



おなかすいてないの？」と尋ねてきました。さらに証の時間になると、11歳の娘が立って、母がビールを飲むのをやめて教会に戻って来てくれたのでうれしいです、と証をしました。目立たないようにと思っていたのに、これでもうおしまいです。

後で監督と会い、宗紀評議会がもう一度開かれることを知らされました。緊張もし、怖い気持ちもしましたが、きちんとけじめをつけるべきだと思いました。監督と初めて面接をして以来、それまでに経験したことのない喜びを感じていたのです。物の見方が変わり始めたのでしょうか。自分の生活を、そして家族や友人をもっともっと愛するようになったのです。以前は残りの人生をビールなしで過ごすなんてとても考えられないと思っていました。でもそのときからほぼ毎日、心に希望がわいてくるのを覚えるようになりました。

わたしが不安になった一つの理由は、副監督の一人が息子の友達の父親だったことです。わたしの過去の罪を聞いたら、息子さんをわたしの家ではもう遊ばせないとおっしゃるだろうと思いました。でも、そう感じられるのなら仕方がない。わたしはそう決心しました。自分の人生で最も大切なこと、つまり教会の会員としての資格を完全な形で回復することを阻むものは何もありませんでした。

宗紀評議会の少し前、わたしは初めて総大会の模様をラジオで聞きました。その中でハワード・W・ハンター大管長がこうおっしゃいました。「罪を犯した人々、心に傷を負った人々にはこう伝えたいと思います。戻って来てください。悔い改めの道は、時には厳しいものがありますが、人を高め、完全な救いへと導いてくれます。」(『聖徒の道』1995年1月号、p.9) 大管長がわたしに直接語りかけてくださっているように感じました。わたしは心の中でこう言いました。「わたしは戻ります。約束します。」ハンター大管長はわたしにとって特別な方です。わたしが心から耳を傾けた最初の預言者だからです。

### 愛の評議会

宗紀評議会の夜がとうとうやって来ました。監督会の方々とともにひざまずいて祈りながら、わたしは強い御霊の力と、兄弟姉妹としての言い尽くせない愛を感じました。この方々はわたしのことについて以前から知っていらっしやるわけではありません。でもわたしには、彼

らの思いやりと愛が伝わってきました。でも、息子の友達の父親が話を切り出しにくそうにしておられたときには、わたしの息子とはもう遊ばせないと言うための口実を見つけようとしておられるのだと思いました。ところが、彼はこう言われたのです。「あなたの息子さんやほかのお子さんたちはとてもいいお子さんですね。あんな素晴らしいお子さんですから、さぞかし立派なご両親だろうと思います。」

評議会の最後に監督がこう言われました。「あなたを末日聖徒イエス・キリスト教会の資格ある教会員として認めます。」その言葉を聞いたとき、わたしは大きな喜びを覚えました。

家に帰ったわたしは、家族にすべてを話し、ともに笑いたい、泣きたいと思いました。でもみんなもう寝ていました。そこでわたしは天の御父に祈りました。御父の愛と思いやりに対して、義にかなったさばきつかさとして働いてくださった尊敬する方々に対して、これまで力になってくれた家族や友人に対して、そしてわたしが人生の中で受けているそのほかのあらゆる祝福に対して感謝をささげました。

ところがその日の真夜中、夫もわたしも目を覚まし、家の中に悪霊の存在を感じました。それは監督室で御霊を感じたときと同じような強さで迫ってきました。わたしはサタンの存在を感じたのです。わたしはベッドに横たわりながら、教会に戻ることによって自分がサタンを怒らせたことに気づきました。わたしは全力で祈りました。すると間もなく、サタンが去るのが分かりました。

夫とようやく話ができたのは、翌日の夕方、家から50キロ離れた町まで夫を迎えに行ったときのことで。その町から戻る車の中で、夫はこう尋ねました。「夕べは何があったんだろう。」

夫の考えは、人が罪を犯したときは、それは本人と神との間の関係で、他人は関与すべきでないというものでした。ですから、前の晩はただ教会の集会に行くとしか言っていなかったのです。わたしは監督室での出来事をすべて話しました。そのとき感じた愛と慰めの気持ち、そして教会の会員としての完全な資格を得たことを彼に打ち明けたのです。また、天の御父が悔い改めという制度を用意して、子供たちが生活を正せるようにしてくださっていることを証しました。それに、わたしの取った行動をサタンが快く思っていないために、夕べ二人ともサタンの力を感じたことを話しました。また、この家に

神権があったらと思うけれど、なくても御父はわたしたちの家族を見守ってくださることも話しました。そして最後にイエス・キリストの御名によって話を終えました。そうした方がいいと強く感じたからです。

夫は家に着くまで一言も口にしませんでした。でも、最後にこう言ったのです。「君の言うこと、正しいと思うよ。」

### 悔い改めの実

教会に戻ってからたくさんの祝福がわたしと家族に注がれました。

什分の一を完全に納めようと決心したとき、わたしは夫に話すのをためらいました。我が家の財政は夫が担当していましたし、借金の返済をしようとしているときに支出が増えることは歓迎されないだろうと考えたからです。そのことについて話し合うために断食し、祈ることにしました。

わたしは戒めについて、また戒めを守ることによって受ける祝福について夫に説明しようと準備をしました。ところがいざ話そうとすると、「どれほど夫を愛しているか」「福音によって夫がすばらしい人間であることをどれほど悟ったか」が口をついて出てきました。そして、彼の妻として誇りにできることの数々を話しました。また、夫が教会に加わらなくても、これからもずっと彼を愛し続けていくことを伝えました。

わたしは自分自身の幸福のことばかり考えて、夫が疎外感を覚えていることに気づかなかったのです。

夫はめったに涙を見せない人です。その彼が泣いていましたから、心に深く感じるものがあったのでしょう。夫はわたしを失うことを恐れていました。わたしが正しい生活に戻れば、わたしの方で夫を必要としなくなるのではと考えていたのです。わたしを十分に助けることができないことから、夫としての資格に欠けると考えていたようです。

わたしは自分自身の幸福のことばかり考えて、夫が疎外感を覚えていることに気づきませんでした。天父は夫の最も必要としていることを話し合えるように導いてくださったのです。

やがて什分の一のことを話す時が来ました。夫はこれ以上請求が増えないのであれば納めてもよいと言ってくれました。どうしたらよいかは分かりませんでした。わたしは1995年1月を什分の一を納める最初の月に決めました。そしてその元旦の日、教会から帰って4歳の娘の服を脱がせていたときに、水ぼうそうが出ているのに気づきました。

娘が保育所に行けないので、わたしは夜勤の同僚に電話をしてシフトを交替してもらうことにしました。夜勤であれば、日中家にいられるからです。そして2週間後に受け取った給料の明細を見ると、本来ならば保育所に支払わなければならなかったはずの金額と什分の一は同じ額だったのです。それから2週間後、予想どおり2歳の子が水ぼうそうになりました。そのときも別の人とシフトを交替することができました。わたしは、天父が什分の一を納める方法があることをわたしに教えてくださっているのだと思いました。什分の一はそのとき以来



欠かさず納めることができています。

わたしは教会に行くのは好きでしたが、再活発化のある時点で、気持ち完全に安らいでいないのを感じていました。正しいことをしていると心からの証あかしが必要だったのです。「わたしは子供のために教会に戻ったのか。両親のためか。それとも自己満足のためか。福音について証を持つとは、正確にはどういうことなのだろう。」そう考えていました。

わたしは聖餐会せいさんで会員の方々が述べる証に熱心に耳を傾けました。そして自分の証が本物かどうか考えました。そんなある日曜日のこと、福音の基礎クラスの教師が、証を得るためにしなければならなかった一つのこと、イエス・キリストが生きておられ、この教会を管理しておられるとの信仰を持つことだと教えてくれました。

わたしはその言葉に強く心を打たれ、涙が頬を伝いました。その信仰ならわたしにもあったからです。わたしはイエス・キリストが生きておられ、わたしを愛してください、教会を管理しておられることを知っていました。それだけでなく、宗紀評議会や祈り、知恵の言葉、指導者が神によって召されていることも信じていました。その日、わたしは自分にも証があったとの思いを抱きながら帰宅しました。

### 再活発化へのわたしの思い

大勢の方々から「何がきっかけで戻れたの」とよく聞かれます。以前は備えができたときに、すばらしい監督さんが電話をかけてくださったからと答えていました。でも、今になって思うのは、再活発化のプロセスはもっと前に始まっていたのではないかということです。

両親はわたしにとって、義と正直、誠実さと愛の模範でした。彼らはわたしに正しい原則を教えてくださいました。またわたしは、神権を尊び模範によって人を導く人々とともに生活し、働いてきました。その中の大勢の方々が時間を取ってわたしの疑問に答えてくださったのです。

12人のお子さんを持つ近所のご家族は、上の二人の子供を何度も何度も食事や家庭の夕べ、教会の活動に招待してくださいました。近所の方々は、我が家が音楽のボリュームをもっと下げてくれたらとか、パーティーをもっと早めに切り上げてくれたらとかきっと思われたことでしょう。でも、何一つ苦情はおっしゃいませんでした。いかなる時点であれ、もしわたしが教会に行っていない

ことを理由に近所の方々から疎外感を味わっていたら、監督からの申し出に心を開くことはなかったでしょう。単に隣人を愛することからたくさんの祝福が得られたのです。

わたしが運転している車は中古車で、買ったときからルームライトがつきませんでした。日中は何でもないので、夜、暗い中を運転するときは少々不安でした。何か書いてあるものを読む必要があるときは、街灯の下に車を止めて読まなければならなかったからです。また、物を落とすと探すのが大変でした。ルームライトがないというのは実に不便なものでした。でも、その不便さに慣れてしまっていました。

あるとき友達にその車を貸したら、ライトを付けて返してくださいました。電球は1ドルもしなくて、1分足らずで交換できたそうです。すばらしい変化でした。これまでよくライトなしでいられたものだと思います。

それから数週間のうちに、「ようやくルームライトが新しくなったことは、ついに御霊みたまの光を得たことと似ている」と、考えられるようになりました。わたしは自分の人生はこれでいいと思っていました。しかし現実、御霊の光がなくて苦しんでいたのです。暗い車の中に入って行くときの恐れは、悔い改めをせずに死ぬときの恐れを思い起こさせます。また、物が読めるように街灯の光を求めることは、信頼できる友人と福音について話し合うことと同じです。でも、そのような借り物の光は、いつでも頼りにできるものではありません。暗がりでも物をなくすことは福音の原則を忘れることに似ています。そしてそれは、御霊の光がないときによく起こります。わたしはルームライトがないままでも車を運転し、生活することができました。でも、平安や導き、理解といった祝福は得られませんでした。光を元に戻すきっかけとなったのは悔い改めでした。監督とお会いし、教会に再び出席するようになって、そのプロセスが始まったのです。

わたしは最近神殿に参入し、霊的にさらに強められました。今は、まだ十分に光を得ていらっしゃる方々に、わたしの知っていることをお伝えできればと願っています。夫は時々教会の活動に出席しており、会員の皆さんはいろいろな形で歓迎してくださっています。わたしは、天父と御子イエス・キリストと教会員の皆様に感謝しています。この方々はかつてのわたしではなく、将来のわたしの姿を見てくださったのです。□

# 備えはできているだろうか

マウロ・プロペルツィー  
ILLUSTRATED BY GREGG THORKELSON

**真**夜中の0時15分。寒い夜でした。警察署を出てイタリア警察の青いアルファ・ロメオに乗り込みました。イタリア人のすべての若人は、軍隊や政府の仕事に1年間服務するように義務づけられています。わたしは警察に配属されました。その日のわたしの任務は、ベニスのちょうど北東に位置するエソロとカプリノの町を、深夜の午前0時から朝の6時までパトロールすることでした。

同僚との関係はいつもうまくいっているわけではありませんでした。彼の気性の激しさとわたしの忍耐不足のせいでした。しかしそのような二人の関係も、その勤務日の前の週末にはかなり良くなってきていました。

突然、援助を求める通報が、無線で入りました。「31号車です。どうぞ」とわたしは応答しました。本部は、ベニスの北にある田舎町で銀行強盗が起きたことを、わたしたちに知らせてきました。危険が迫っていることを察知し、わたしの心臓は高鳴りました。無線官は、警官が一人強盗に撃たれたと告げました。犯人である4人の男たちは、ソビエト製の自動銃、クラッシュニコブスで武装しているということでした。そして、犯人たちは白のランチア（訳注——イタリアの自動車名）で、このエソロ方面に猛スピードで向かっているらしいのです。

「了解」と言って無線を切ると、思わず武器に手を伸ばしました。同僚に向かってこう尋ねました。「強盗に出くわしたらどうしようか。」同僚の返事は冷静かつ簡潔なもので、ただ「撃つ」の一言だけでした。

同僚は車のギアを素早く動かしました。わたしは、間もなく自分が置かれるであろう様々な状況をあれこれと考え始めました。わたしは、自分たちの生命が危険にさらされていることに気づいていました。また、もしわたしたちがその4人の強盗にばったり会ったなら、生き残

れる見込みはあまりないだろうと思いました。同僚は、感情をほとんど表に出さず、黙ったままでした。

この仕事と祖国のために喜んで死ぬのだろうか。わたしの頭に浮かんだこの問いは、任務に就くに当たって交わした宣誓の言葉を思い出すことで、すぐに答えられました。わたしはイタリア国民のために奉仕し、たとえ命を失おうとも国民を犯罪行為から守ると約束していたのです。

エソロの大通りに到着すると、拳銃のハンドルを右手で固く握り締めました。次の言葉が頭に浮かびました。「死ぬ準備はできているだろうか。天父にお会いするため、みもとに行く備えはできているだろうか。」そして、家族、これまでの人生、福音に対する証<sup>あかし</sup>について考え始めました。自分の弱さについて思い巡らし、すぐに自分の良心に恥じる行いはしていないと気づきました。大きな過ちは犯していませんでした。これまで不親切にしてしまったすべての人たちには、その都度謝罪してきたと感じました。そう考えると、驚くほど心の平安を感じられました。高鳴っていた鼓動は元に戻り、くつろいだ気持ちにさえなりました。

結局その夜は強盗と対峙<sup>たいじ</sup>することはありませんでした。その後数か月して、わたしは警察での1年間の任務を終えました。その間、一度も銃を用いる必要は生じませんでした。でも、あの夜の経験は決して忘れないでしょう。この経験を通じて、天父はわたしをいつでもみもとにお呼びになれるのだ、と自覚しました。わたしは、悔い改めた清い心で、平安を感じながらこの世を去れるよう準備していきたいと思います。□



リ  
ンダ・ガンサーは、ニューヨーク市のセントラル・パークのベンチに座り、子供たちが滑り台やぶらんこで遊んだり走り回ったりする間、キルトの四角い布に細かく針を刺していきます。彼女はもう20年近く子供たちをこの公園に連れて来ては、小さな布切れに思い出や価値観を象徴するものを刺しゅうしてきました。

「夫のボールとわたしが初めてこの街にやって来たころ、わたしたちには3人の幼い子供たちがいました」とリンダは語ります。「この街で子供を育てようという教会員はほとんどなく、

新鮮な果物や野菜が街で手に入らないときには、母や祖母が瓶詰めしていたあらゆる物を書き出し、その中の多くをキルトの四角い布に表現しました。そうやって針を刺すことで、リンダは開拓者であった先祖や家族の歴史に対する称賛の気持ちを形にし、自分の子供たちが目にし、楽しめるようにしたのです。彼女はまた新しい環境にあっても、独立の精神、勤勉、自立、収穫の律法、自尊心を家族に教えました。

瓶詰めのキルトが出来上がると、今度は家族の物語を題材にしたキルトに

## 布につづる 時の流れ

ペトレア・ケリー



ほとんどの人からよした方がいい、と勧められました。わたしは自分が育った小さな町や、独立し、自立した女性や男性のことを考え、そこでの価値観をこの新しい環境に持ち込めたらと思いました。また、自分の子供たちには多くの時間を外で走ったり遊んだりして過ごしてほしいと思っていました。そこで、子供たちを公園に連れて来るようになったのです。縫い物をするので、子供たちと遊んでいない時間を忙しくできましたし、都会で生活することに対する不安を解消する助けにもなりました。

リンダは、自分が尊敬する人々の価値観を、独創的な方法で新しい生活に取り入れていこうとしました。食料の保存は、彼女にとって自立を象徴するものでした。そこで、保存するための

取りかかりました。そして様々な作品がそれに続きました。その中には、子供たち一人一人の思い出のキルトがあります。この伝統は、リンダの長女、ジャネルが7歳のときに始まりました。リンダとジャネルはジャネルがいちばん上手に描いた絵や、特別な言葉、そして算数の問題に至るまで様々な思い出の品を集めて四角い白い布に写して刺しゅうにしました。それからリンダがその布を寄せ集め、台所のテーブルの上でキルトに仕上げました。ジャネルがバプテスマを受けるときまでには、彼女の小さなころの思い出がキルトになって残されました。その後もそれぞれの子供たちの特徴や個性が映し出された6枚のキルトが、子供たちの助けを借りながら作り上げられました。今、リンダと末娘のジェシーは8

APRIL 29 1966



CUNTHER

上—ガンサー家族の木のキルトは、まさに世代をつないでいる。

だ円形にかたどられた写真に写っているポールとリンダは1966年にソルトレーク神殿（右上）で結婚した。

彼らの8人の子供の名前が木の幹をらせん状に覆っている。

どんぐりにはリンダとポールの兄弟とその伴侶のサインが書かれている。木の枝は、ガンサー家の先祖を表している。リンダは先祖のサインをまねてキルトに刺しゅうし、もしサインが分からない場合はブロック体の文字で刺しゅうした。

木を取り囲む家々は、これまで二人が住んだ所を表している。

左ページ—リンダ・ガンサーは自分のキルトについてこう表現している。

「どれも試行錯誤で作った物ばかりで、完璧な物は一つもありません。」





7歳になる末娘のジェシーは、母とともに自分のキルトを作り始めた。これは自分の描いた絵を布に写しているところ。

枚目のキルトを作るために絵や作品を集めているところです。

リンダは子供たちがキルトに入れる絵を選ぶときに、彼らの子供たちが見たいだろうと思うものを選ぶよう励ましてきました。子供たちが選んだ絵の

中には、自分たちの家の絵、自画像、家族の絵、好きな授業の絵、遊び場の絵、それにバス停の絵さえあります。このキルトは、誕生日や祝日など、特別なときに飾られます。

「文章に表せたらいいと思いますが……。」リンダは少し考えてこう続けます。「でも、それには静かな環境が必要です。夫や8人の子供たちとアパートに住むわたしには、それは無理な話です。このキルトなら、家族とともにいながら、公園でも家でもできます。美術の教育を受けているわけではないので、やり始めたとき何ができないかも分からず、何でもやってみて自分なりのものを作り上げることができました。うまくできたものも、それほどでもないものもありますが、わたしは布が好きですし、布を使って美しい物を



ニューヨークのアパートでキルトに使う絵や作品を集めるリンダと子供たち。

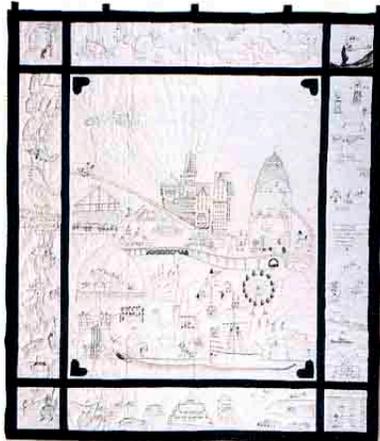
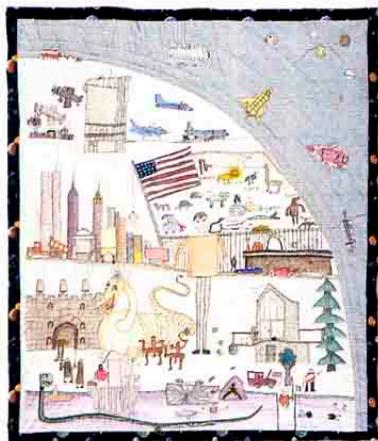
作るのが大好きです。」

自分の愛する布や、家族、そして街に囲まれて、リンダはこう語ります。「このような方法でわたしは、わたし自身の歴史や家族の歴史をつづてきました。」

左下——若き科学者である7番目のジャスタスは、キルトに使うために自分の描いた宇宙船、竜、さめのいる掘りのある城、そして自分の顔の絵を選んだ。中央下——6番目のジ

ヤンセンは白黒のキルトに使うために、カーニバルと海賊船、そして聖典からの物語やジョセフ・スミスの絵を入れた。右下——2番目のジョーダンのためにリンダが格子柄の布

で縁取りしたキルトには、非常に精密に描かれたマンハッタンにある礼拝堂の説教台の絵がある。恐らく、大変観察力のある彼が毎週前の列に座って観察した成果であろう。



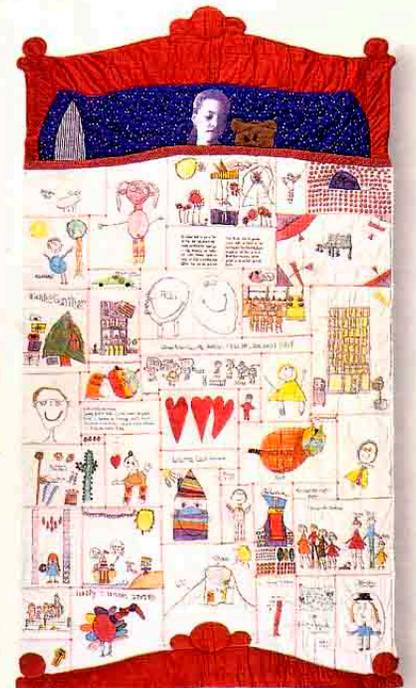


3番目のジェネッサは、お気に入りの青いドレスをキルトにあしらった。彼女の数々の作品が自分の後ろの壁に飾られている。この構想は、家族でメトロポリタン美術館へ行った経験から思いついた。

右ページ—このキルトの細かな図柄の一つ一つには、ガンサー家にとって大切な物語が秘められており、子供たちは自分の誕生日の週にこのキルトを使えることになっている。例えば鶏は、ガンサーのひいおばあちゃんの小さいときの仕事が毎朝早く起きて鶏にえさをやることだったという物語を表している。みんなの大好きな聖典からの物語である、ヨナとくじらの絵もある。また、ポールとリンダが結婚したソルトレーク神殿や、ポールが伝道したドイツからの手紙もある。□

左—5番目のジュリアがキルトを縫っている姿が表されている。

右—4番目のグリーンは、自分の作品にくるまってベッドに寝ているという図柄に仕上げた。





Dulthe  
Am-Hochgrung 33  
Berlin, Germany

LYNDA 1972



# わたしは忘れない

リチャード・M・ロムニー



**ケ**ベック州内ではどの車のナンバープレートにもある言葉が書かれています。家紋や大理石の像にも見られます。「ジ ム スビアン」(Je me souviens)というこの言葉は「わたしは忘れない」という意味で、ケベック州のモットーになっています。

ここには忘れられないものが実に多くあります。ケベック州はかつてフランスとイギリスが北アメリカの支配を巡って戦った場所です。遊牧生活を営むアメリカインディアンの部族が住む広大な荒野でもあります。この地は、豊富な資源をいかに賢明に使用するか課題となっています。北アメリカ大陸でも最古の開拓地が幾つか残っていますが、壁を巡らしたとりでの跡や石畳の街路の周囲は、今ではビジネス街や摩天楼に囲まれています。

また、ここに住む末日聖徒の若者たちは、単にその歴史観や独自性を維持するためだけでなく、イエス・キリストの福音にいつそう忠実に生きるために忘れてはならないことがある地だと強く感じ取っています。

## チェックリスト

例えば、リア・ドサルは個人のチェックリストを作っています。「リストにある事項を毎日行うように努力しています」と言います。15歳のリアは、ホークスバリーの近くの、ケベックとオンタリオの州境にある小さな町サンポリカルプに住んでいます。「聖文を

30分読み、最低30分間セミナーの勉強をした後に、『成長するわたし』に取り組み、それから祝福師の祝福文を読みます。お祈りもたくさんします。そうすれば自信が持てるようになります。寝るときにはその日の霊的な目標が達成されているようにします。そうでなければ良い気持ちで眠れません。」

リアには「今日わたしはキリストと一致することを選ぶ」という個人的なモットーがあります。そして、この言葉に忠実であるように最善を尽くしています。

## 思い出



「忠実であることによって得られる祝福を忘れてはなりません」と、シクレーイミに住む15歳のマルク・アンドレ・コテは言います。「いつもその目標を忘れないことです。オリバー・カウドリが失意に陥ったとき、主は、忠実であれば与えられると約束されたものを思い出すように諭されました(教義と聖約6:13参照)。日の栄えの王国と昇栄について考えるなら、人生の苦難を克服する力を見出すことができます。」

マルクは知っているはずですが。彼は4年間教会を離れていましたが、2年くらい前に「一体自分は何をしているのかと自問し」続けました。「何かを探し求めていました。そして、以前教会で感じた気持ちを思い起こしたのです。御霊から『行きなさい』と語られているように感じました。そこでもう一度だけ試してみることにしました。

教会に戻るのには難しいだろうと想像していましたが、容易なことでした。以前集っていたときより良い印象を受けたほどです。わたしはたくさん読み、数多く学び、この教会が真実であり、救い主が望まれた方法で組織された教会であるという確かな証<sup>あかし</sup>を得られました。」

## 模範

ケベック市から来た17歳のアメリカインディアン、ジュリア・アワシシユもマルクと同意見です。「バプテスマのときに交わした聖約を決して忘れてはなりません」と彼女は言います。「天父との約束によって、わたしたち

40ページ—アレクサンドラ・ジルベールとベッセラ・ラビエールは、「ジ ム スビアン」(Je me souviens—「わたしは忘れない」という意味の言葉)を人生の指針とするケベック地方の数多くの青少年を代表している。

下—リア・ドサルと父のエバン、弟のジャン-フランソワ。



は教会の会員として強められます。教会に入ってから6年になりますが、母と二人で改宗したことをうれしく思っています。福音は喜びのメッセージであるがゆえに、解決すべき問題を抱えているときにとても大きな力となり、また自分は幸福であると思ひ起こすように助けてくれます。」



ジュリアによると、彼女と母親がケベック北部の外れにあるオベドジワンという小さな村に親戚を訪ねようと戻ったとき、最初は「わたしたちが末日聖徒であるということだからかなりうわさをされていた」と言います。「でもわたしたちの模範を目にし、わたしたちが気さくで普通の人だと分かったようで、今では皆さんが快く受け入れてくれるようになりました。」

下——母親に感謝の気持ちを表すマダリーンとオリビア・モンミニーの姉妹。母親は二人のセミナリーの教師でもある。

右ページ——ジェローム・ラピエールとロベール・イマニュエル・ドゥシェン。



## 完全な平安

ケベック市の14歳のベッセラ・ラピエールは、初めて死者のためのバプテスマのためにオンタリオ州のトロント神殿に旅行をした経験をいつまでも忘れないと言います。「あれほどたくさんの末日聖徒の若い会員と一緒にいるだけで幸せでした。喜びで感謝の涙が目にあふれました」と彼女は説明してくれます。「長年夢に見てきたことでした。それが今や現実のものになろうとしていたのです。主の宮の玄関をくぐった途端、完全な平安を感じ、その霊的な力はバプテスマが進むにつれて強まりました。それ以来、いつもその気持ちを感じています。今では誘惑に直面するとき、神殿で感じたその気持ちを思い出します。あの平安をいつも感じていたいと思いますし、何度も神殿に行きたいと望んでいます。」

アレクサンドラ・ジルベールは、神殿の奉献式でゴードン・B・ヒンクレー大管長に会ったときに同じような安心感をえました。アルマ市に住む14歳の彼女は次のように言います。「そのときはまだ大管長ではありませんでしたが、今は大管長です。ヒンクレー長老は神殿に入ろうと階段を上られていたのですが、立ち止まってわたしと握手し、少しの間わたしと会話を交わされました。とても感じの良い方です。英語だけで話されたので、わたしにはあまり内容を理解できませんでした。

でも、とてもすばらしい印象を受けました。大管長にお会いできたことと、生ける預言者がいることを決して忘れません。」

## 約束



13歳のロベール・イマニュエル・ドゥシェンは、クサンジョン湖のほとりのアルマ市から45分くらい離れたサンタモニックという小さな町に住んでいます。「小さな支部に集っていますけど、教会で行うことはほかのユニットと変わりません。青少年の活動がありますし、毎週日曜日には教会に行きます。教会員でない友人は、もし一緒にしたいことがあれば誘ってくれますが、日曜日にはほくは教会に行くことを理解してくれます。」彼は安息日を聖く守るという約束をしたのです。そしてその約束を忘れません。

彼は召しを尊んで大いなるものとする、という約束も忘れません。「アルマ支部にはアロン神権者は二人しかいませんから、決して多いとは言えません。でも奉仕をするようにできるかぎり努力しています。そして、支部には、教会で育ち将来支部を発展に導くたくさんの子供たちがいると、いつも思い起こします。そんな子供たちのために、わたしたちは道を備えてよく働き、良い模範を示す必要があるからです。」



サンローレンス川の河口に近い州の東にある町リムスキーにも、同じような決意を胸に秘めたアロン神権者がいます。「ほくたちは全会員の家を一軒ずつ訪問して断食献金を集め始めました」と16歳のウーゴ・ラベックは言います。「支部の会員の約半





オリビアとマダリーン・モンミニーは教会で互いに支え合い、地域社会で奉仕することに喜びを見いだしている。

分はこの地域のほかの町に住んでいるので、何軒かは車で回らなければなりません。でも、支部長によると、ジョセフ・スミスの時代にはアロン神権者が断食献金を集めに家々を回ったそうですから、ほくたちがしても当然でしょう。ほくたちの責任を忘れないための助けになります。」

### 聖文

「毎朝家族と聖文を読んでいます」と、スコットに住み、レビにある教会に集っている17歳のオリビア・モンミニーは言います。「そうすれば一日の間、家族と一緒に聖文を読んだことや賛美歌を歌ったことについて考え、それが心にとどまります。」

ほかにも同じことをしている人たちがいます。モントリオールのラモンワードの青少年たちは定期的に聖文を学んでいて、それぞれ好きな聖句があります。15歳のアリアン・カロンの好きな聖句は、ニーファイが世の喜ぶことでなく神の喜ぶことを書くという箇所です(1ニーファイ6:5参照)。「小さいときに母と一緒にこの聖文を読んで、とてもすばらしい御霊を感じたので、先に進まずもう一度繰り返して読んだほです。この経験で、聖文が神から授けられたものだとうに理解できました。それがわたしの個人的な証の始まりでした。」

15歳のオリビエ・カルテはアルマ第53章の若い兵士たちの話が大好きです。「彼らは母親の教えを忘れず、戒めに

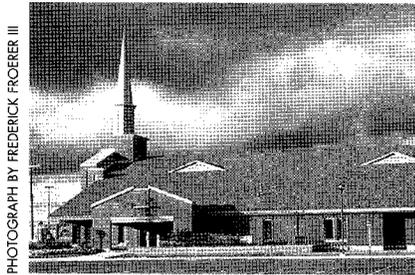
# オープンハウス

完全に忠実でした」と彼は言います。

17歳のエステ・カロンは「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる」というピリピ人への手紙第4章13節が気に入っています。彼女はこの聖句をしばしば思い浮かべます。そして、信仰を持たなければという気持ちになるときに、何度も何度もこの聖句を繰り返しています。

## 目標

ケベック州の末日聖徒の青少年は、毎日心に留めておくべきことがたくさんあると知っています。良い模範を示す必要がある、知恵の言葉を守る、純潔を保つ、そして家族に優しく接し、福音を分かち合うといったことなどです。しかし、常に救い主を覚えているという、毎週聖餐を受けることで新たにしている聖約は、言葉と行いにおいてもすべての面で守るように努力しています。□



PHOTOGRAPH BY FREDERICK FROENER III

友達を作る最も良い方法の一つに、自宅に招待することではないでしょうか。モンリオール・マウントロイヤルステーキのモンリオールワードはこの原則を実践しました。ワードの新しい礼拝堂が近くのラサールの町の人々の高い関心を生む様子を見て、ワードの指導者が建

物を見学者に開放することにしたのです。

このオープンハウスの日に大きな役割を果たしたのが、ワードの青少年たちでした。この末日聖徒の青少年たちは軽食を準備し、駐車場の案内を行い、玄関で訪問客にあいさつしました。

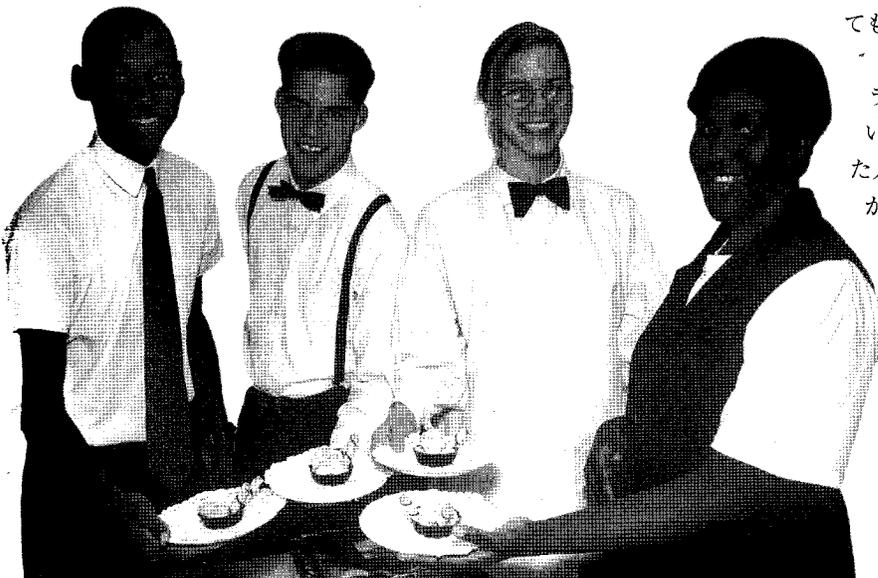
「わたしたちが何を信じてどんなことをしているのか、地域の人たちにもっとよく知ってもらえる機会になったので、とても良い経験になりました。」15歳のメリッサ・ポワリエはそのように話します。教会堂の見学に訪れた人は300人を上回りました。

どうして家族でオープンハウスに参加したのかと尋ねられたある男性は、次のように答えました。「去年行われたすばらしい鍍入れ式を見てから、この美しい建物が建つ様子をずっと目にしてきました。ですから今度はぜひ中の様子を見てみたかったです。とても楽しみにしています。」

また、ある女性はこう言っています。「自分で信仰している宗教がほかにありますが、建物を見てみたかったです。」彼女は何時間も質問を行い、帰り際にこう口にしました。「皆さんがキリストを信仰しているとは知りませんでした。とても感銘を受けました。」

新しい礼拝堂には多少抗議の声も上がりました。「二人の男性が雨の中6時間も外に立ち、末日聖徒に反対する内容の印刷物を配っていました」とメリッサの双子の兄弟のショーンは言います。「ぼくたちは気の毒になって、2枚のお皿にクッキーを載せて持って行ってあげました。とても感謝してくれたようです。」

オープンハウスのほかにも、ワード主催によって、ラサール市の市長や市議会、そして工事の請け負業者、デザイナー、設計士など、建築にかかわった人々を招待しての夕食会が開かれました。「食事はかなり早いペースで進んだため、わたしたち給仕係はほとんど休む間もなく、迅速に働きました」とショーンは言います。「でも、たくさんの方から褒めていただきました。これは地域社会が教会に関心を持ち、わたしたちを受け入れてくれる良い兆候だと思います。」□



# 象の突進

福音を分かち合うことに関して、わたしは突進する象のように、まったく容赦しませんでした。

テリー・リード

ILLUSTRATED BY RICHARD HULL

**教** 会員になってからの初めの数か月は、大変な時期でした。とりわけ、わたしの友人にとってはそうでした。わたしはただ、自分の見いだしたものに、特に天父とイエス・キリストを身近に感じられることで得られる心の平安と喜びに、心を躍らせていたのです。

しかし、回復された福音とその教えに対する新たな知識を分かち合いたいと思うあまりに、会員ではない友人が何か悪いことをしたと感じると、わたしはすぐにそれをいさめるようになりました。

しかも、突進する象のように、まったく容赦しませんでした。

初夏のある晩、わたしは自分が人を裁いていたこと、また独善的であったことによりやく気づきました。バプテスマを受けてから5か月ほど過ぎたころ、親友と一緒に野外コンサートに行きました。コンサートが始まる前、持って来た弁当を食べる場所を探しながら、会場を歩き回っていたときのことで。周りを見ると、大勢の人が、食事をしながら飲むためにワインを持って来ていました。教会の会員になって、どんなに分別がついたかを示す絶好の機会を逃すまいと、わたしは非難を込めて友人

にこう言いました。「見てごらんよ、みんなワインを飲んでいる。うんざりしちゃうよね。」

すると、優しく忍耐強い友人は、わ

たしの方に向き直ってこう言ったのです。「ユダヤ教徒はレストランに食事に行ったとき、ハムを食べている人をいちいち注意して回らないと思うよ。」

この立派な見解を聞いた途端、わたしはしばらくじっと黙って、その言葉の意味について思い巡らしました。そしてこれまで学んだレッスンの中で、「教会員は出て行って隣人を裁きなさい」などと教えられたことはなかった、と気づきました。そうではなく、「模範を示す」とか「隣人を愛する」という言葉がよく使われたことを思い出しました。

恥ずかしく思いながら、わたしは友人に感謝し、ほかの人々への配慮がなかったことをわびました。

友人の言葉にわたしは大きな影響を受けました。そのときからほかの人々に変わるように求めるのをやめ、自分を変えるように努めることにしました。自分が信ずることは今でもほかの人々に分かち合いたいと思っていますが、もう少し穏やかに行うようにしています。友人が教会について気楽に話せるような雰囲気を大切にしているのです。□





# 「神の栄光にひたすら目を向けて」

ベス・デーリー

く普通の材料を使って人が作り出す美には、まさしく驚きを感じます。例えば、交響曲は限られた数の音符を使って作曲されます。すばらしい絵画はたった3色の原色によって描かれます。何でもない布の切れ端も、愛情のこもったキルトとなって、夢や希望を伝えてくれます。作者が使う材料は別に何でもないごく普通のものであることが多いのです。時間と才能と労力、そして靈感が、どこにでもある材料を特別なものに作り変えるのです。

わたしは神が人間を美術評論家のような目で批評されず、神の識別する目で見えてくださることにとっても感謝しています。顕著な芸術的才能には恵まれていないように見えても、だれもが備えた特質を見事な芸術品にまで仕上げた人は大勢います。奉仕という交響曲、親切という舞踊、高潔という彫刻を、わたしはこの目で見てきました。

ノーベル文学賞を受賞する作家がいる一方で、聖文を愛することを家族に忠実に教えている数知れない男女がいます。美術館に展示されている貴重な絵画を残す画家がいる一方で、犠牲

と献身の生涯を残す人が無数にいます。世で名声を博している作曲家がいる一方で、その一生が神への賛美の歌となっている人が大勢いるのです。

すべての悔い改めの祈りは神にとって重要であり、すべての忠実な家族は地上における小さな天国となることができます。すべての誠実な努力は、信仰と希望のこもった行いとなり、すべての徳高い行いは、ほかの人の信仰を強めます。

いちばん大切なのは、どのような手段で行うかではなく、どのような動機で行うかです。「すべての者はその隣人の益を図るように努め、また神の栄光にひたすら目を向けてすべてのことをなすようにしなければならぬ」のです（教義と聖約82：19）。□





「進め、いざ進め」 グレン・S・ホプキンス画

イリノイ州ノーブーの家を追われた末日聖徒の最初の団は、1846年2月、ミズーリ川を渡り、アイオワ州南東のシュガー・クリークのそばに野営した。そこで雪と凍える寒さに見舞われた聖徒たちは、2,000キロに及ぶ旅を始めた。その間、教会の指導者たちは用心深く見張りを務めた。



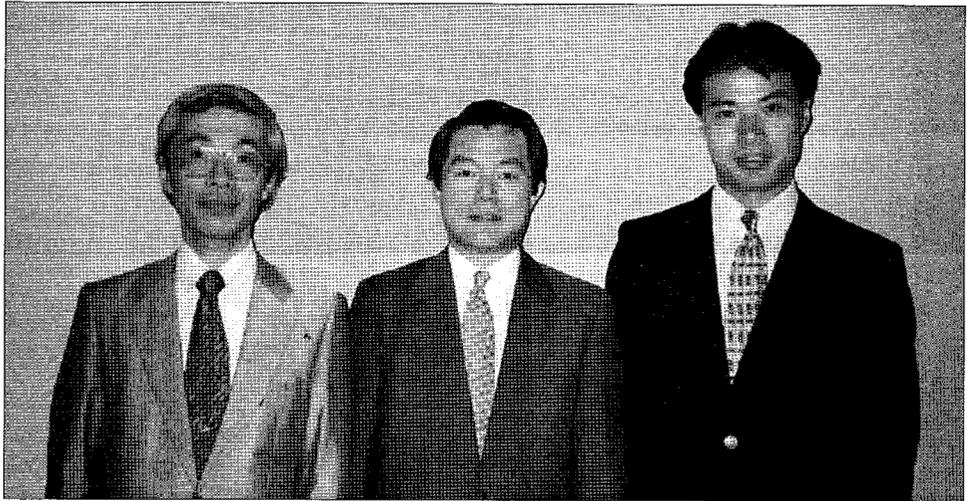
歴史的に名高いカナダのケベック州にあって、末日聖徒の青少年は救い主を忘れずバプテスマの聖約を守り、自らの歴史を築いている (本誌「わたしは忘れない」p.40参照)。



2902979883005

## 新たに組織された熊本ステーキ

去る5月18日、アジア北地域会長会長のデビッド・E・ソレンセン 長老の管理の下に開催された熊本地方部大会で、熊本地方部が分割され、新たに熊本ステーキと長崎地方部が組織されるとの発表があった。熊本ステーキは、熊本ワード(旧熊本支部)、清水ワード(旧熊本北支部)、坪井ワード(旧白川支部)長嶺ワード(旧長嶺支部)、大分ワード(旧大分支部)、延岡支部、八代支部、大牟田支部の8ユニットで構成される。ステーキ会長として角屋光典兄弟(写真中央)が召され、第一副会長として高橋泰三兄弟(写真左)、第二副会長として相浦真範兄弟(写真右)が、その任に当たる。



### シオンの隅石となるように

熊本ステーキ会長  
角屋光典

5月18日、アジア北地域会長会長のソレンセン長老の管理の下で熊本地方部大会が開かれました。この大会が開かれる1週間前になって突然、会場の変更があったり、大会時間の短縮を余儀なくされたり、車が故障したりするなど様々な問題が起こりました。しかし、主に助けを求め祈ることによって、それらの問題はすべて解決され、素晴らしい大会を開くことができました。

#### 地方部からステーキへ

この大会において、熊本ステーキと長崎地方部を新たに組織すると発表がなされ、それによって、新しく熊本ステーキが誕生しました。このようにシオンの熊本ステーキが生まれるに

当たり、歴代の伝道部長はじめ、6月までその召しを果たしてくださったピンコック伝道部長、宣教師、神権指導者ならびに会員一人一人の献身的な働きが、主の時、主の御旨にかないこのような祝福をもたらしたものと確信しています。これまで長年一緒に集ってきた長崎地区の聖徒の皆さんと離れるのは寂しく思いますが、主は、この九州地区に特別な計画を持っておられ、さらに多くの祝福が注がれるものと確信しています。

#### ふさわしい者となるための召し

大会の前日、ソレンセン会長から「あなたをステーキ会長に召します」と言われたとき、その責任の重さに圧倒されると同時に、自分はふ



角屋ご家族

さわしくないのではないかとこの気持ちを感じました。それは、これまで地方部長として働いてきた日々を思い返して、自分は、この地の人々に十分な働きをしてきたらどうかという自責の念があったからです。しかし、召しはふさわしい者となるために与えられるという言葉聞いて、この召しを受け決意をしました。

### 先祖たちの偉大な信仰に 励まされ

今年の4月にソルトレークを訪問し、

以前、福岡伝道部の部長をしておられたフィゲレス兄弟に、ソルトレーク神殿や、宣教師訓練センター、また、各地に点在するワードやステークセンターを案内していただく機会がありました。この訪問により、教会の基を築いた偉大な先祖たちの信仰と大きな犠牲、勇気、力に触れ、主が確かに生きておられ、この教会を導いてくださっているという証<sup>あかし</sup>を強めることができました。

わたしは、このステークが「シオン」の隅石となるようにわたしが設けたも

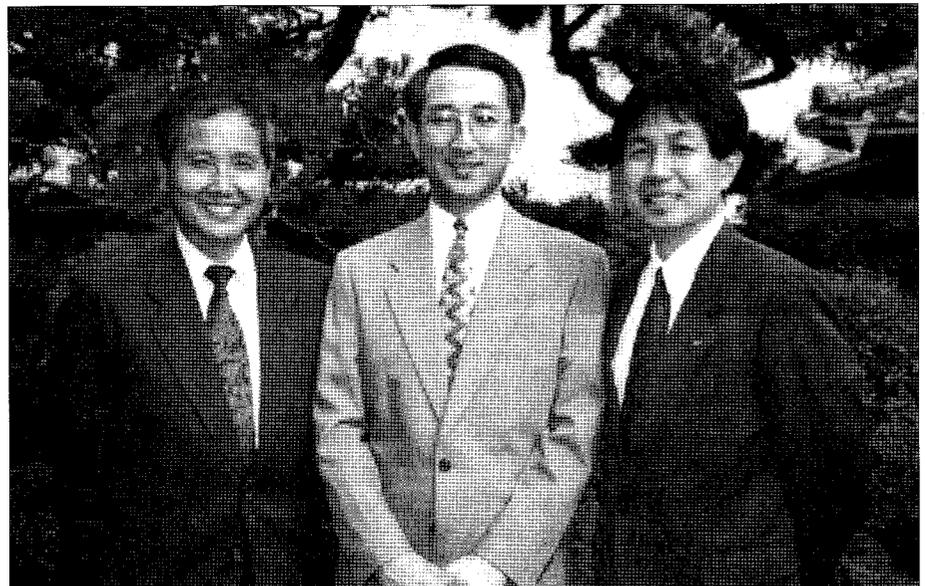
のであり、宮殿のような優美さをもって磨き上げられる」(教義と聖約124:2)という言葉どおり、この地に住む聖徒の方々とともに主の業を進めたいと思います。そして、ここに住む人々が、信仰を強め、福音の喜びを実感し、家庭、支部、ワードの中でいっそうの霊性、一致、愛をはぐくみ、キリストのような人格を築くことができるように、またすべての人をキリストのもとへ導きキリストの愛で養うことができるようになることを信じています。(すみや・みつのり)

## 角屋光典ステーク会長の 紹介

1950年福岡県に生まれる。1973年に改宗。岡山大学法文学部卒業。1979年に市橋久美子姉妹と結婚。5人の子供がいる。現在、三井海上火災保険株式会社八代支社長。教会にあっては、これまで地方部の部長、副部長、地方部評議員、支部長、長老定員会会長、書記などの責任を果たしてきた。長嶺ワード所属。

## 新たに組織された長崎地方部

熊本地方部の分割を受けて、新たに長崎地方部が組織された。長崎地方部は、旧熊本地方部の長崎支部、諫早支部、佐世保支部に加え、福岡ステークより編入された佐賀支部の4ユニットで構成される。また地方部長として才木剛兄弟(写真中央)が召された。第一副部長には大平八紘兄弟(写真左)が、第二副部長には石井健也兄弟(写真右)が召され、その任に当たる。



# 伝道する地方部を目指して

長崎地方部長  
才木 剛

5月18日に熊本地方部がステーキになり、これまで熊本地方部に所属していた長崎、佐世保、諫早の3支部と福岡ステーキに所属していた佐賀支部が一緒になり、長崎地方部が設立されました。その際、地方部長の召しを受けました。

わたしは20歳のとき、長崎支部でバプテスマを受けました。青春時代を長崎支部で過ごし、長崎をこよなく愛しています。大学卒業後に伝道に出て、その後、横浜ステーキ内で約9年間生活しました。そして再び、実家のある諫早市に戻ってもう8年半が過ぎました。

わたしにとってこの長崎は信仰の原点であり、ほんとうの故郷です。この地にステーキが設立され、シオンが確立されるのを夢見ている一人です。今回、尊い召しを受け、地元を愛する兄弟、姉妹たちとともに心一つにして、この実現に向け邁進していくつもりです。

伝道部長会より地方部長としての召しを告げられたとき、頭に浮かんできたのが、アルマが語った次の聖句でした。「まことに、悔い改めて信仰を働かせ、善い行いをし、絶えず祈り続ける人には、神の奥義を知ることが許され……る。また、この同胞を悔い改めに導く務めがわたしたちに与えられたように、何千もの人々を悔い改めに導く務めがその人に与えられる。」(アルマ26:22)「この長崎、佐賀地方に、まだまだ福音を知らない同胞が大勢いる。その人々に福音を伝えることに全力を尽くすことが務めである」と言われたようでした。そのためには、悔い改めて信仰を働かせ、善い行いをし、絶えず祈り続けることが必要なのです。そうすれば、主がその務めをわたしたちに与えてくださるのです。

主は伝道する者に多くの助けと祝福を与えてくださいます。「また、行って王国のこの福音を宣べ伝え、あらゆる点で引き続き忠実である者は、心が疲れることも暗くなることもなく、体や手足や関節が疲れることもない。髪

の毛一筋も、知られずに地に落ちることはない。また、これらの者は飢えることも、渴くこともない。」「そして、あなたがたを受け入れる者がだれであろうと、わたしもそこにいるであろう。……わたしはあなたがたの右におり、また左にいる。わたしの御霊はあなたがたの心の中にある。また、わたしの天使たちはあなたがたの周囲にいて、あなたがたを支えるであろう。」(教義と聖約84:80, 88)

喜びをもって福音を伝えることにより、その地は御霊に満ち、主や天使が常に訪れてくださる祝福された地となります。また、主の使いである宣教師も多くを刈り取ることとなります。

このような伝道精神で一致することを呼び続け、自らも実行することがわたしの務めであると自覚しています。まさに「伝道する地方部」が心に浮かんだテーマなのです。すでに、この地で多くの兄弟姉妹たちの模範があることを心から感謝しています。

特に長崎地方部の兄弟姉妹は、熊本地方部がステーキになるのを目の前で見ました。近い将来、長崎でも同様のことが起こるように、信仰をもって歩み続けたいと思います。

## 宣教師の言葉を信じて

宣教師と初めてあったとき、わたしはひげと髪を長く伸ばしげたを履いて大学へ通っていました。人生について特に目的もないままラグビーをして過ごしていました。そのようなわたしに



才木ご家族



角屋ご家族

さわしくないのではないかという気持ちを感じました。それは、これまで地方部長として働いてきた日々を思い返して、自分は、この地の人々に十分な働きをしてきたらどうかという自責の念があったからです。しかし、召しはふさわしい者となるために与えられるという言葉を受けて、この召しを受け決意をしました。

### 先祖たちの偉大な信仰に 励まされ

今年の4月にソルトレークを訪問し、

以前、福岡伝道部の部長をしておられたフィゲレス兄弟に、ソルトレーク神殿や、宣教師訓練センター、また、各地に点在するワードやステーキセンターを案内していただく機会がありました。この訪問により、教会の基を築いた偉大な先祖たちの信仰と大きな犠牲、勇気、力に触れ、主が確かに生きておられ、この教会を導いてくださっているという証<sup>あかし</sup>を強めることができました。

わたしは、このステーキが「シオンの隅石となるようにわたしが設けたも

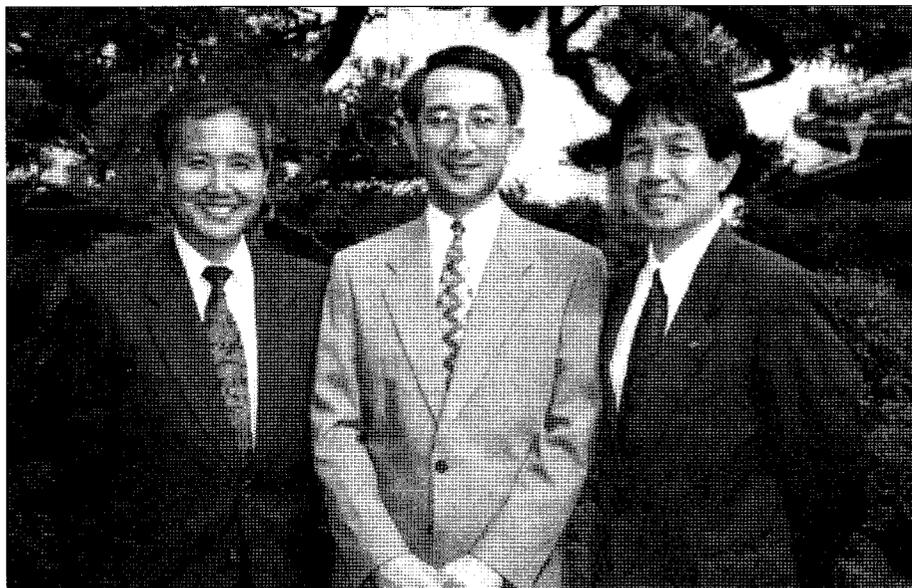
のであり、宮殿のような優美さをもって磨き上げられる」(教義と聖約124:2)という言葉どおり、この地に住む聖徒の方々とともに主の業を進めていきたいと思えます。そして、ここに住む人々が、信仰を強め、福音の喜びを実感し、家庭、支部、ワードの中でいっそうの霊性、一致、愛をはぐくみ、キリストのような人格を築くことができるように、またすべての人をキリストのもとへ導きキリストの愛で養うことができるようになると信じています。(すみや・みつのり)

## 角屋光典ステーキ会長の 紹介

1950年福岡県に生まれる。1973年に改宗。岡山大学法文学部卒業。1979年に市橋久美子姉妹と結婚。5人の子供がいる。現在、三井海上火災保険株式会社八代支社長。教会にあっては、これまで地方部の部長、副部長、地方部評議員、支部長、長老定員会会長、書記などの責任を果たしてきた。長嶺ワード所属。

## 新たに組織された長崎地方部

熊本地方部の分割を受けて、新たに長崎地方部が組織された。長崎地方部は、旧熊本地方部の長崎支部、諫早支部、佐世保支部に加え、福岡ステーキより編入された佐賀支部の4ユニットで構成される。また地方部長として才木剛兄弟(写真中央)が召された。第一副部長には大平八紘兄弟(写真左)が、第二副部長には石井健也兄弟(写真右)が召され、その任に当たる。



# 伝道する地方部を目指して

長崎地方部長

才木 剛

5月18日に熊本地方部がステーキになり、これまで熊本地方部に所属していた長崎、佐世保、諫早の3支部と福岡ステーキに所属していた佐賀支部が一緒になり、長崎地方部が設立されました。その際、地方部長の召しを受けました。

わたしは20歳のとき、長崎支部でバプテスマを受けました。青春時代を長崎支部で過ごし、長崎をこよなく愛しています。大学卒業後に伝道に出て、その後、横浜ステーキ内で約9年間生活しました。そして再び、実家のある諫早市に戻ってもう8年半が過ぎました。

わたしにとってこの長崎は信仰の原点であり、ほんとうの故郷です。この地にステーキが設立され、シオンが確立されるのを夢見ている一人です。今回、尊い召しを受け、地元を愛する兄弟、姉妹たちとともに心一つにして、この実現に向け邁進していくつもりです。

伝道部長会より地方部長としての召しを告げられたとき、頭に浮かんできたのが、アルマが語った次の聖句でした。「まことに、悔い改めて信仰を働かせ、善い行いをし、絶えず祈り続ける人には、神の奥義を知ることが許され……る。また、この同胞を悔い改めて導く務めがわたしたちに与えられたように、何千もの人々を悔い改めて導く務めがその人に与えられる。」(アルマ26:22)「この長崎、佐賀地方に、まだまだ福音を知らない同胞が大勢いる。その人々に福音を伝えることに全力を尽くすことが務めである」と言われたようでした。そのためには、悔い改めて信仰を働かせ、善い行いをし、絶えず祈り続けることが必要なのです。そうすれば、主がその務めをわたしたちに与えてくださるのです。

主は伝道する者に多くの助けと祝福を与えてくださいます。「また、行って王国のこの福音を宣べ伝え、あらゆる点で引き続き忠実である者は、心が疲れることも暗くなることもなく、体や手足や関節が疲れることもない。髪

の毛一筋も、知られずに地に落ちることはない。また、これらの者は飢えることも、渴くこともない。」「そして、あなたがたを受け入れる者がだれであろうと、わたしもそこにいるであろう。……わたしはあなたがたの右におり、また左にいる。わたしの御霊はあなたがたの心の中にある。また、わたしの天使たちはあなたがたの周囲にいて、あなたがたを支えるであろう。」(教義と聖約84:80, 88)

喜びをもって福音を伝えることにより、その地は御霊に満ち、主や天使が常に訪れてくださる祝福された地となります。また、主の使いである宣教師も多くを刈り取ることとなります。

このような伝道精神で一致することを呼び続け、自らも実行することがわたしの務めであると自覚しています。まさに「伝道する地方部」が心に浮かんだテーマなのです。すでに、この地で多くの兄弟姉妹たちの模範があることを心から感謝しています。

特に長崎地方部の兄弟姉妹は、熊本地方部がステーキになるのを目の前で見ました。近い将来、長崎でも同様のことが起こるように、信仰をもって歩み続けたいと思います。

## 宣教師の言葉を信じて

宣教師と初めてあったとき、わたしはひげと髪を長く伸ばしげたを履いて大学へ通っていました。人生について特に目的のないままラグビーをして過ごしていました。そのようなわたしに



才木ご家族

とって宣教師の言葉はとても新鮮で、なぜか懐かしい響きがしました。わたしは福音をスポンジのように吸収していきました。すぐにジョセフ・スミスの体験を信じ、『モルモン書』を信じバプテスマを決意しました。

長崎支部の兄弟姉妹たちは、ひげをそり髪を切ったわたしの姿を見るまではほんとうに改宗するとは信じてくれなかったようですが、1975年7月4日にバプテスマを受けました。問題は、わたしがクリスチャンになることを知った父が勘当すると言ったことでした。その当時、わたしは長崎市内に下宿していましたが、バプテスマを受けるとすぐに実家に帰りました。なぜなら宣教師が「この福音は家族を幸福にする」と言った言葉を信じたからです。父は同じ家にいるのに3か月間一言も口を利いてくれませんでした。

宣教師の言葉の結果はどうかというと、両親は大学卒業後、伝道に出ることを認め、結婚も祝福してくれました。

今では、両親と同居して8年がたちました。両親の改宗はまだですが、約3年前テレビの全国放送の「大家族の夏休み」という番組と一緒に出演したりして、とてもにぎやかに楽しく生活しています。宣教師の言葉はほんとうでした。福音は心から行動するとき、わたしたちを真の幸福へと導いてくれます。

わたしは改宗後、様々な体験をしました。それらを通じて心からの揺るぎない証<sup>あかし</sup>を申し上げます。ジョセフ・スミスは確かに1820年に天父と御子にまみえました。そして、そのことはすでに予任されていたことでした。大勢の生者も死者もまだ前世にいる霊たちも待ちわびた出来事でした。そして、福音の回復が起こりました。また主の再臨に備えるためこの教会が回復されました。そして、ヒンクレー大管長は生ける主の預言者です。

最後に、愛する妻と8人の子供たちに感謝します。妻とは前世から友であ

ったと思います。御霊<sup>みたま</sup>が妻との出会いを導いてくれました。わたしはほんとうに永遠の家族になりたいと願っています。この福音はわたしにとって宝です。欠点や弱点の多いわたしですが、この福音により、主に近づくことにより、変わることができると思っています。(さいき・つよし)

## 才木剛地方部長 の紹介

1954年長崎県諫早市に生まれる。1975年長崎にて改宗。長崎大学経済学部卒業。名古屋伝道部で宣教師として伝道する。1979年に門司優子姉妹と結婚。2人の息子と6人の娘がいる。能力開発を専門とする教育関係の会社に勤務。これまで支部長、高等評議員、ステーキ伝道部長、大祭司グループリーダー、伝道主任、神権会・日曜学校の教師、ボーイスカウト隊長などの責任を果たしてきた。諫早支部所属。

## 400回の講演を重ねて 講演活動と著作によって神様<sup>あかし</sup>を証できる喜び

熊本ステーキ長嶺ワード  
野尻千穂子

わたしは1987年に、夫とともにバプテスマを受けました。わたしは12歳の夏、脊髄の手術を受け、その結果、胸から下のまひした体で暮らしています。そんなわたしですが、恵まれて結婚し、一人の娘の母にもなれました。

わたしが初めて神の存在を心で感じる事ができたのは、娘の産声を聞いたときです。胸から下がまひした体なのに、わたしは自然分娩で赤ちゃんが産めたのです。「オギャー」と泣くわが子の産声を聞きながら、神の御手を強く感じていました。神様がおられると確信したわたしは、神の喜ばれる生き方がしたいと思うようになり、本屋

で『聖書』を買い求め、一生懸命読む毎日となりました。

真理を求め始めて8年後、末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師の訪問を受け、『モルモン書』と出会えたときの喜びは、筆舌に尽くし難いものがあります。

毎日、レッスンを受け、半月後に主の道を歩む証として、主人とともに喜んでバプテスマを受けたのです。毎週日曜日、同胞と御言葉を学ぶ度に、天父とイエス・キリストへの愛が膨らんでいきました。

教会に集い始めて5年後、神様の愛を知った者として、まだ神を知らない人々に、わたしなりに伝道をしたいと思うようになりました。障害とともに



野尻千穂子姉妹

生きる喜びや感謝の気持ちを書いて、新聞に投稿を始めたのです。わたしの原稿は、毎月掲載されるようになり、やがて読まれた方々から、体験を話してほしいと講演を依頼されるようになりました。



# 「世の光」の影響力

田中清姉妹の講演会を通して



沖縄那覇ステーク  
普天間ワード  
金城 寛

「教会外の人で、教会のホールがこんないっぱいになるなんて…」3月15日、NHKテレビで手話ニュースのキャスターを務める田中清姉妹の講演会が沖縄那覇ステークセンターで開かれ、詰めかけた約300人がその話に耳と心を傾けました。聴衆のほぼ半分は、聴覚障害者や地域の手話サークルなど教会外の一般の参加者。講演とその後の交流を通して、障害を持つ人々に対する田中姉妹の深い愛と理解が伝わってきました。そして、純粋な愛は宗教や立場の違いを超えて人々の心を結びつけるということを実感させられました。

翌16日には宮古支部でも開催されたこの手話講演会の特筆すべき点は、沖縄県内のおもな新聞社と放送局6社に加え、県と那覇市の身体障害者福祉協会や地域の手話サークルなど計11団体が後援を表明し、協力してくれたことです。新聞各紙が講演会の記事を掲載し、後援に加わらなかったNHKも、朝のローカルニュースで、宮古の講演会の映像を約1分間報道してくれました。

報道機関や福祉団体は、通常特定の宗教を応援したりしません。しかし今回の経験を通して、「あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」(マタイ5:16)という主の教えを田中姉妹のように実践するならば、人々を動かすことができると感じました。

## 「偽善者のラッパ」ではなく

田中姉妹の講演会が沖縄で開かれることになったのは、宮古支部の手話サークルが教会広報部に講師の派遣を依頼したのがきっかけです。その結果、末日聖徒がその成功談や人生観などを語って人々を啓発するスピーカーズ・ビューローのプログラムを通して、田中姉妹が派遣されることになりました。

宮古だけでなく、那覇でも講演会が開かれることが決まったとき、「これは教会の宣伝になる」という思いが、ステーク広報ディレクターに召されたばかりのわたしの心をよぎりました。でもこれは「自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい」(マタイ6:1)という主の勧告に反します。

それに、わたしはそれまで聴覚障害者や難聴者を援助する活動にかかわったことがありませんでしたし、那覇近郊の教会にも手話サークルはなかったので、そのような教会が突然手話講演会を主催する理由を何と説明してよいか、ほんとうに困りました。

そして考えれば考えるほど「偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きならす」(マタイ6:2)ような態度ではなく、純粋に聴覚障害者と手話への理解を呼びかける必要があると強く感じました。

実際、後援依頼で報道機関や福祉団体を訪問したとき、「なぜ今、教会が手話講演会を主催するのか」という質問をしばしば受けました。その度に正

直に事情を説明し、誠実な態度で理解を求めるときに、最初は否定的だった相手の心が次第に開いていきました。そして、講演会の話の概要(次頁参照)を文書で提出することで、それを読んだ人々が心を動かされ、後援の承諾を得ることができたのです。

## 真の奉仕

講演会の内容は、新聞で紹介されたとおりですが、講演会の後、教会のホールや通路、庭で、田中姉妹の周りには聴覚障害者や地域の手話サークルの会員たちの輪がいつまでも絶えませんでした。それらの人々の表情は、喜びにあふれていました。ある高等評議員は「彼らと田中姉妹の結びつきは、教会員が入り込む余地がないほどだ」との感想を漏らしたほどです。それもすべて「偽善者のラッパ」ではなく、ほんとうの「光」の影響です。

広報の手引きには「真の奉仕は何の条件も伴わず、隠れた動機はそこに存在しない。また私心がなく、報いを期待することもない。一緒に働く相手が教会に関心を示そうと示すまいと、一般の教会員や広報役員の召しを受けた人は、地域社会での奉仕に従事すべきである」と記されています。また広報活動と伝道活動は「明確な線引きをしなければならない」とも記されています。

これは結局、教会員が、下心のないほんとうに親切な人になることを求められているということです。そしてそれこそが、わたしたちが「世の光」(マタイ5:14)となる最も効果的な方法なのかもしれません。今回の講演会



音声と手話の両方で同時に行われた田中さんの講演

# 身ぶり筆談でも話しかけること

## NHK手話ニュースの田中さん

「耳が聞こえないけれどもコミュニケーションはできる」と聴覚障害者と健聴者の相互理解を呼び掛ける講演会が、このほど開かれ、NHKの手話ニュースキャスター・田中清さんが「身ぶりで筆談でも話しかけること」をテーマに、講演会を主催した。講演会は「心の架け橋―聴覚障害者と健聴者の相互理解を促す―」をテーマに、県身体障害者福祉協会などが後援し、那覇市の未白館で開かれた。約300人が参加した。田中さんは、両親が盲兄弟五人は聞こえないため、生活そのものが聴覚障害者への理解の実践といえる環境で育った。その経験から、「両親が聞こえなくても手話で話ができたら、友人たちの家族と交わったところから、何となく話しかけること」を指し示した。

「耳が聞こえないけれどもコミュニケーションはできる」と聴覚障害者と健聴者の相互理解を呼び掛ける講演会が、このほど開かれ、NHKの手話ニュースキャスター・田中清さんが「身ぶりで筆談でも話しかけること」をテーマに、講演会を主催した。講演会は「心の架け橋―聴覚障害者と健聴者の相互理解を促す―」をテーマに、県身体障害者福祉協会などが後援し、那覇市の未白館で開かれた。約300人が参加した。田中さんは、両親が盲兄弟五人は聞こえないため、生活そのものが聴覚障害者への理解の実践といえる環境で育った。その経験から、「両親が聞こえなくても手話で話ができたら、友人たちの家族と交わったところから、何となく話しかけること」を指し示した。

の準備を通して、そのことを強く感じました。(きんじょう・ひろし ステーク広報ディレクター)

☆以下の手話通訳者・田中清姉妹の紹介文は、ステーク広報ディレクター金城寛兄弟が田中姉妹にインタビューを行い、マスコミ関係者に送付したもの。

●昭和23年5月31日、聴覚障害者の両親から、1男4女の末子として横浜市に生まれた。きょうだい5人は、健聴者。昭和42年から手話通訳のボランティアを開始。昭和48年から横浜市の手話通訳となり、平成2年にNHKの手話ニュース放送が始まって以来、ニュースキャスターを勤めている。夫との間に3男3女がある。女優の斉藤由貴の叔母。

### 手話は心の架け橋 ―言葉を超えるもの―

「手話で両親と何でも話しました。困った記憶がありません。」この人の話を聞いていると、言葉を超えた何か大切なものが見えるような気がしてくる。

耳の聞こえない両親との生活が、聴覚の壁にとらわれない本質を見極める力を、この人の心にはぐくんだのかもしれない。健聴者には思いもよらない理解が、言葉のしばしからほとぼしる。

「聴覚障害者にとっては、手話が言語そのもの。決して音声言語の代用ではないんです。」当然と言えば当然だが、音声言語に浸りきった者には、既成概念を打ち砕くに十分な衝撃がある。

しかも「聾はひとつの文化」なのだと言う。「健聴者が正しくて、聾者が誤っている訳ではないんです。聾の文化と健聴の文化が別個に存在することを理解しさえすれば、互いの文化を尊重できるように思います。」

手話は、その聾の文化の担い手。日本語が、漢字や外来語を吸収し、幾多の変遷を重ねて現在に到達し、これからもさらに豊かになっていくように、手話の命も息づいている。

生まれたときから、二つの文化が自分の中に根を下ろした。「だから聴覚障害者と手話を理解してもらおうのが、私のテーマなんです。」

NHKが平成2年から放送を始めた手話ニュースは、聴覚障害者に対する一般の理解を促す一つのきっかけとなった。放送開始以来、キャスターを務める田中さんの歩みもまた、特筆すべきものがある。

昭和42年、横浜市が中心になって手話通訳者のボランティアを結成した。全国でもまだ数えるほどの試み。指導者の確保もままならず、田中

さんの家族に白羽の矢が立った。

田中さんは、同じ年に市内の高校を卒業して就職したが、時には職場にまで手話通訳を依頼する呼び出し電話がかかってきた。「病院とか警察とか、緊急なので出向かざるを得ません。」

新しい試みに関心を示した新聞やラジオが、その活動を取り上げたが、まだまだ一般に浸透するには至らなかった。

「やっと理解が得られ始めたのは、平成4年に最終年を迎えた国際障害者年の10年あたりからです。それでも差別は、いまだにありますし、完全な参加と平等への壁は、まだまだ厚いんです。」

「子供のころ、聴覚障害者はみんな自立していると思っていました。」意外な言葉が飛び出した。田中さんの両親は、帯の仕立てを請け負っていた。聴覚に障害を抱えた数人の針子を住み込ませ、その生活も支えていた。父親は聴覚障害者協会の役員もしていた。「みんな父と同じだと思っていたんです。」

「自分を欠陥人間だと思っ

ている人がいる」「子供を生まない条件で結婚した」などの現実を知ったのは、少し大人になってからだった。実在する差別を克服する何かが、家庭の中にあふれていた。

「聴覚障害者の両親が、5人の子供を生み、育てるのは、勇気と忍耐が必要だったと思います。6人の子供の親になった今、ますます尊敬の気持ちがわいてきます。」

決して裕福ではなかった。しかし「何かを買ってくれようにならなくても、父は絶対に拒否しませんでした。ただ、そのうちねって言ったんです。」何もかもまると受け入れる父親だった。「母は、何かあると、私を抱きしめてくれました。温かかった。」言葉を超えた交流に、限界はない。

田中さんは言う。「手話を使う人は、まず相手の目を見ます。そして相手の自分に対する気持ちを察知するんです。」

見つめられたひとみの奥に、言葉を超えた何かを見つけてもらえたら、どんなにすばらしいだろう。□



# 「すべてのわざには時がある」

札幌伝道部専任宣教師  
小野耕史

わたしは、福岡で宣教師として働いた兄や、ワードで働く宣教師の模範により自分もいつか伝道に出たいとずっと思っていました。そのため、責任を一生懸命果たし、インスティテュートには必ず出席し、伝道に出る備えをしていました。

そして19歳になる少し前に宣教師申請書を送り、召しが来るのを待っている間、いつも「わたしを必要としている人のところへ召されるように」と祈っていました。

すると、北の方へ召されるのではないかという気持ちと、祖母を改宗させなくてはいけないという気持ちが心に浮かんできました。

それから半年後、待ちに待った召しが届き、どきどきしながら封を開けると、大管長のサインの入った手紙に「あなたを札幌伝道部の専任宣教師として召します」とはっきり英語で書かれてあるのを見て、祈りがこたえられたと感じました。

以前、母が出産を間近に控えたときに水ぼうそうにかかり、おなかの中にいたわたしは生死の境をさまよったという話を両親から聞いたことがあります。しかし、奇跡的に助かってこの世に生を受けたのは、この世において果

たすべき使命があるからだと思いました。その使命こそが、伝道だと思えます。特に、祖母のいる札幌に召されたことは、導きであると感じずにはいられませんでした。

やがて、わたしは任地である北海道へ行き、伝道部長との最初の面接で祖母が手稲支部の地域に住んでいることを話しました。するとその日の夜、最初の任地が発表になり、わたしの初めての伝道地は手稲に決まりました。伝道部長は、「どうぞ、おばあさんを訪ねてください」と言いました。

早速、祖母に電話をすると、とても喜んでくれてぜひ会いに来るように言ってくれました。

祖母は、小学校に上がる前にわたしにひらがなを教えてくれたり、「耕史はほんとうに頑張り屋さんだ」といつも褒めてくれたりして、わたしの大好きな人の一人でした。

しかし、祖母と会うのは、実に7年ぶりだったのでだいぶ緊張していましたが、同僚とすぐに家を訪ねていきました。

実は、7、8年ほど前に宣教師が何度か祖母を訪問しているのですが、そのときはレッスンを受けるまでには至りませんでした。ただ、近所に住んでいて、よく助けてくれた教会員の方に「いつか時が来ますよ」と言われたとき、祖母は「確かに、いつかバプテスマを受けるだろうな」と思ったそうです。

とはいえ、わたしたちもレッスンをすぐに始めたわけではありませんでした。わたし自身、身内とはいえ、長い間会っていませんでしたし、福音を伝える機会がこんなに早く来るとは思っていませんでした。新米宣

教師であったわたしは、レッスンの技術にも自信がなく、いろいろな自分の弱さがよく目につきました。また、身内の人に伝道することは、最近知り合った人に伝道するのはまた違った意味の緊張がありました。そのときには、ほんとうによく神様に祈り、また、コリント人への手紙第12章9節から10節の「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」という聖句からほんとうに大きな励ましを受けることができました。

そして、最初の訪問から1か月が過ぎようとしていたころ、わたしたちは祖母に福音を伝え、バプテスマを施したいという率直な気持ちを話しました。すると、祖母は意外にもレッスンを受けることを快く承諾してくれました。レッスンを始めると、それからは、ほぼ順調にレッスンは進んでいき、目標を設定した日にバプテスマ会を行うことができました。それは、わたしにとって生まれて初めて施したバプテスマでした。祖母が水から上がったとき、それまでの不安も何もかも吹き飛び、すべてが喜びに変わりました。あのときの気持ちは決して忘れないでしょう。

祖母はバプテスマを受けたことについて、「これが時だったんだね」と言いました。わたしが宣教師として、この札幌に来たのはまさにこのためだったと確信しています。

祖母がバプテスマを受けるに備えて多くの助けをしてくださった過去の宣教師、教会の兄弟姉妹、伝道部長、そして同僚に感謝しています。また、支えてくれた家族に感謝しています。

「時が続くかぎり、大地が存在するかぎり、地の面に救われる人が一人でもいるかぎり」伝道は続きます（モロナイ7:36）。確かにこの業が神の業であって、真実の福音が「弱者や純朴な者によって世界の果てまで」伝えられることを証いたします（教義と聖約1:23）。（おの・こうじ 横浜ステーク川崎ワード出身）



小野長老（写真右）と、祖母の小野千恵子姉妹。バプテスマ会にて。

# 新しい局面を迎える家族歴史の業

地域家族歴史アドバイザー補助

森村 久男

1982年、日本で初めての「人名抄出プログラム」という画期的な業が開始されました。今、ここまで来たわたしたちの歩みをまた将来における日本の家族歴史のビジョンをご紹介します。

曾祖父母までの家族の記録を作成することは比較的容易です。そのために日本では4代家族歴史探求を会員の基本的な務めとして奨励してきました。まずは現在まで、この業がどんなペースで進んできたかを振り返ってみましょう。

1980年12月に東京神殿が献堂され、その後少しずつ家族の記録の提出が増え始めました。1985年以降は安定した状況で、毎年ほぼ4万人から5万人もの名前が提出されています。この数字の背景には聖徒たちの信仰と祈り、努力、経済的負担があります。家族歴史活動が信仰生活の中に根を下ろしていることの証拠と言えるでしょう。

「家族の記録」の提出枚数は、毎年2万5,000枚から3万枚で、一枚当たり約1.6人の名前が神殿に送られています。ただし、詳細に見てみると1985年以降の記録提出枚数のうち

出者の約半数は、いまだ10枚未満にとどまっています。残念なことではありますが、またこれからが楽しみであるとも言えます。

かりにこのような方々がいったん中止した作成作業を再開し、4代家族歴史を完成させるならば、数十万の死者に救いの手を差し伸べることが可能になり、霊界で待っている先祖が大勢喜んでくれることになるでしょう。ただし枚数が問題ではなく、いかにして先祖を救うかという精神が大切であることは言うまでもありません。

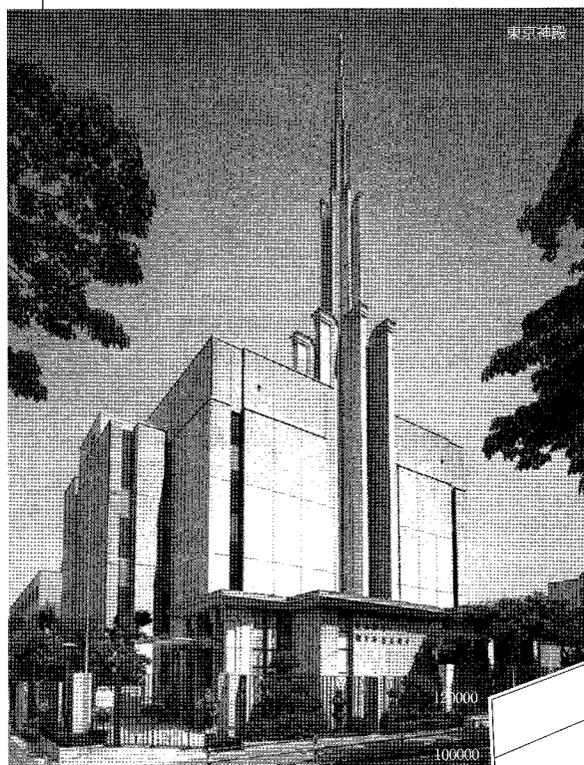
一方、東京神殿での神殿儀式執行能力は最近、非常に伸びてきました。エンダウメントは毎年4万人から7万人の緩やかな増加傾向にあり、バプテスマに至ってはここ数年急激に伸び、10万人を超えています。全国各地から大勢の教会員が多大な犠牲を払い、神殿参入を心がけていることが、このような目を見張る結果となって表れているのです。

昨年ヒンクレー大管長が訪日された際、「この国にこれだけの力が……。」

（『聖徒の道』1996年8月号、ローカルp.7）と感じられた理由の一つは、日本の会員の霊性が神殿儀式を通して高められているからではないでしょうか。

またデータによると、提出された死者の人数より神殿儀式数が上回っている年度が多いことに気づき

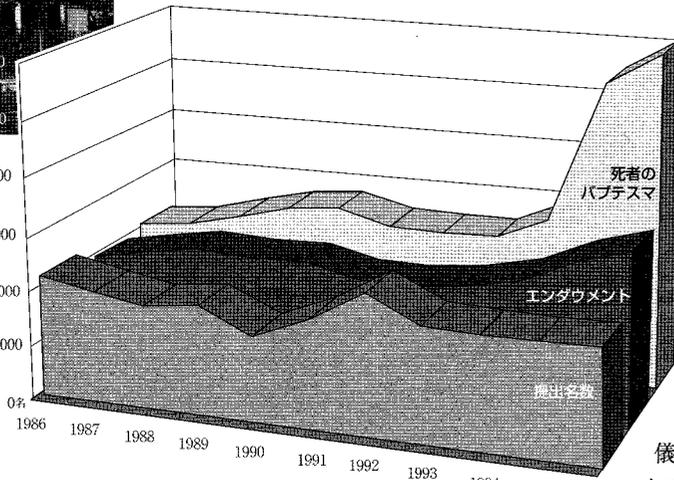
ます。自分の家族歴史にまだ着手していない方、途中で中断している方、資料を入手してはいるが完成させていない方は、ぜひ先祖の救いのために一歩を踏み出していただきたいと思います。



## 東京神殿の現在と4代家族歴史

ジョセフ・スミスは『教会歴史』(History of the Church) の中で次のように述べています。「わたしたちがこの世で神から託されている最も大切な責任は、死者を探すことである。」

わたしたちは預言者の勧告に従って家族歴史を探求し、死者の贖いの業を進めてきました。幸いなことに日本では明治5年に戸籍制度ができて記録が保管されています。一部の地域では、戦災や震災などで焼失している場合もありますが、大多数の会員にとっては、戸籍謄本を利用して4代すなわち自分の



●東京神殿における提出名数と儀式執行数の推移

の約半数は、一人で100枚以上提出した少数の会員の働きによるもので、一部の熱心な方に依存しているという傾向が地域によっては見受けられます。提



地域会長会は1995年5月16日付けの手紙の中で「新会員や家族の記録を提出していない会員に、必要な援助を与えて、4代系図プログラムを達成できるように助ける」ことを指示しています。これにこたえるため、幾つかの鍵となる行動を提案します。これらを試すことによりエリアの霊がワード/支部に注がれ、おのずと活動が強められます。

## 2 経験者の力を借りる

●神殿家族歴史委員会を組織したり、家族歴史相談員を召すことにより、家族歴史活動に常に関心をもって携わる人々の力を借ります。

## 1 模範による指導

●監督会、支部長会は自分の4代家族歴史のうち未完成部分があればそれを作成するように何かを始める。模範による指導が大切です。

## 3 家族歴史クラスを作る

●日曜学校に家族歴史クラスを作る。通年の常設でも、年3か月といった季節的なものでもよい。数人の初めての方を招待しましょう。



## 4 家族歴史コーナーの開設

●月2回、例えば第1と第3日曜日の聖餐会后1時間ほどホールの隅に「家族歴史コーナー」を設け、だれかが座っている。興味を持つ方の相談に乗ることができます。

## 5 年間スケジュールに組み込む

●年間スケジュールに数回、ファイヤサイド、神殿準備セミナー、家族歴史をテーマとした聖餐会を計画する。

### 人名抄出プログラム

系図に関して広い範囲の興味をお持ちの方もおられるでしょう。一般にも各種の家系譜の書籍が発刊されています。例えば『寛政重修諸家譜』『寛永諸家系図伝』『徳川諸家系譜』また『〇〇家系譜』などと題するものもあります。いろいろな時代の様々な家の系図を調べること自体は価値のある立派な研究と言えますし、将来わたしたちの先祖探求に役立つ時が来るかもしれません。

しかし、そのことと神殿儀式は直接には結びついていません。神殿に提出する名前はあくまでも個人の家系のつながりがあるときのみに限ります。自分に関係のない場合、名前をそれらの書物から抄出して提出することを避けるべきです。誤解しないでいただきたいのは、会員のみなさんが自分の先祖を探求することが基本であり優先すべき務めであるということです。

一方、神殿儀式の執行数は「家族の

記録」による人名提出数を上回っています。名前が不足しているのに儀式ができるのかと疑問に思われるかもしれませんが。実は「人名抄出プログラム」がこの不足を解消するうえで大きく貢献しています。これは自分の先祖以外を探求し神殿に提出することを教会として承認している唯一の例外です。

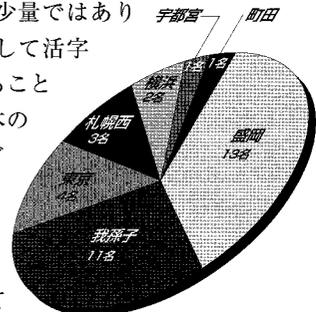
日本で最初に人名抄出プログラムが実施されたのは1982年のことです。当時の東京東ステークで6人の人名抄出者が召され、先鞭せんべんを着けました。ついで1984年には名古屋西ステークでも行われています。そして1995年、我孫子ステークを中心に12人の人名抄出者が召され、人名抄出作業が全国的に開始されました。家族歴史部に保管されている記録類から死者の人名を抄出して神殿に送るといふ、日本家族歴史探求の新しいページを開く作業がスタートしたのです。

ソルトレークの家族歴史図書館では、常時200人余りの家族歴史宣教師が世界中から集まり、1、2年の任期で

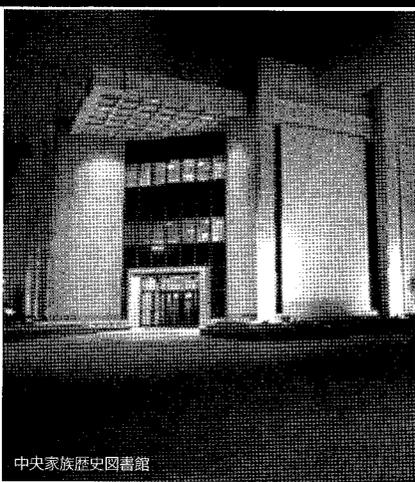
働いています。またオーストラリアでも家族歴史宣教師の働きが盛んです。それらの国々では、宣教師の方々が古い記録に残された名前を直接、読み出して抄出することができます。

しかし日本では、まず「古文書解説」という作業を経なければ抄出することができません。わたしたちが毛筆書体で書かれた記録を解説できるようになるには、少なくとも3年から5年以上の訓練を受けなければなりません。

ところが大変幸いなことに、私的団体や地方自治体が県市町村史を編さんする際、それら系図関連の古文書のうちごく少量ではありますが、資料として活字体に改訳していることがあります。日本の人名抄出プログラムは今のところ、これらの出版された史料を基にして行われているのです。



●現在、人名抄出にご協力いただいているステーク/地方部と、人名抄出者数



中央家族歴史図書館

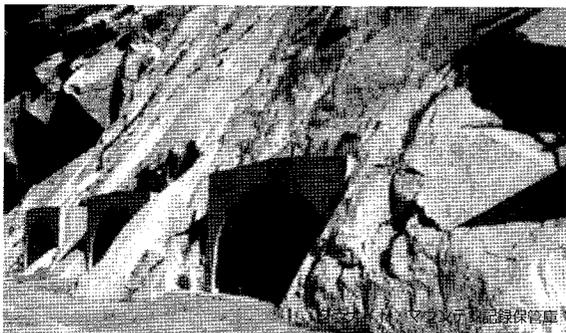
現在では日本の人名抄出者も35人となりました。これらの人々の献身的な働きによって、江戸時代の繁栄を支えた大勢の人々に、キリストによる救いの機会を提供できます。実にすばらしいことです。

### コンピューターによる家族歴史探求

ところで、諸外国（アルファベット言語使用諸国）での家族歴史探求は、どのような方法でなされているのでしょうか。もちろん、祈り求め、努力をし、到達する課程は日本と共通しています。しかし、大きな違いはコンピューターを使って家族の記録を作成していることです。家族歴史のコンピューターシステムとはどのようなものか、どのような利点があるのか、それをご紹介するために、まずはアメリカ合衆国ユタ州のユタ系図協会、グラナイト・マウンテン記録保管庫へ飛んでみましょう。

\*

ソルトレーク・シティー中心部より車で30分の峡谷に、全山がかろう岩で覆われた岩山があります。その中腹に6本のトンネルが掘られ、マイクロフィルムを保管する施設がつけられています。1938年からマイクロフィルムによる記録の収集活動が始められ、現在



記録保管庫

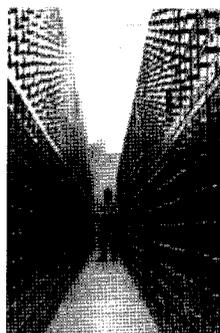


マイクロフィルム読取機

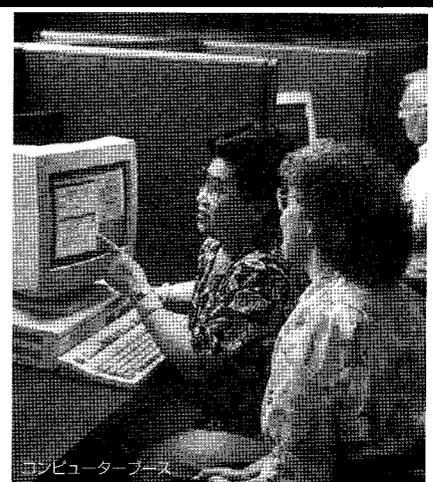
では53か国で250人のカメラオペレーターが、出生・結婚・死亡に関する証明書、遺言状、移民記録、戦没者記録、そのほか膨大な資料を撮影しています。毎年、収録され、カタログ化される1億ページ相当の記録は、マイクロフィルム5万本、マイクロフィッシュ2万5,000枚に及びます。そして今、100フィート（約30メートル）巻きマイクロフィルムにして200万本が、最適の温度・湿度に保たれた専用保管庫に収納されています。総計20数億人に上る人々の記録がここにあります。これら膨大な資料の一部が、コンピューターによる家族歴史探求システムのためにデータベース化されているのです。

\*

わたしがかりにカナダに住んでいて、これから家族歴史の探求を始めるとします。わたしは最寄りの家族歴史センターへ行き、そこに設置されているパソコンの前に座ります。パソコンには「ファミリー・サーチ」（日本語直訳——家族探求）というシステムが入っていて、その中の「アンセストラル・ファイル」（先祖ファイル）を呼び出すことができます。そこにはすでに700万以上の家族の情報が入力されており、個人の出生・結婚・死亡情報を知ることができますし、系図表や家族の記録の形式で画面に呼び出すことも



できます。また、それらの情報の提供者や連絡先も検索でき、互いに情報を交換することができます。わたしは自分の血縁者などの情報があるかどうか調べま



コンピューターブース

す。続いてわたしは「ファミリー・サーチ」の中にある「家族歴史図書館蔵書目録」を呼び出して、ユタ系図協会や中央家族歴史図書館で所有している書籍やマイクロフィルムの請求番号を調べます。図書館を通じて安い費用で書籍やフィルムの写しを取り寄せ、センターにある機器を使って読むことができます。そこにわたしの血縁者などの記録が見つけれられるかもしれません。

そういったことと平行して、自分でも資料集めに努力する必要があることはもちろんです。資料、情報が少しずつ集まってきました。家族の記録作成段階に入ります。

教会の開発した「パーソナル・アンセストラル・ファイル」（個人の先祖ファイル、略称PAF）というパソコンソフトを35ドルで購入します。同じような機能のソフトが市販されており、数種の中から選択できます。PAFは、個人の家族歴史情報を入力すれば、家族単位に記録をまとめて「家族の記録」や「系図表」などを自動的に作成してくれるという便利なものです。また、PAFに入力した個人情報を入力して「ファミリー・サーチ」を通して「アンセストラル・ファイル」へ情報提供し、また逆に欲しい情報を抜き出すこともできるのです。そのようにして家族の記録が徐々に出来上がり、儀式をしたい先祖の名前も見つかります。また、情報は教会員のみならず一般の方にも公開されていて、一般の方からも情報提供が行われています。

神殿に提出したい死者の名前と情報は「ファミリー・サーチ」中にある「テンプル・レディ」（日本語直訳——神殿準備完了）という機能を使ってフロッピーディスクに落とされます。そ



れをそのまま神殿に送れば、儀式をすることができません。

神殿で儀式を完了した死者の記録は、国際系図索引(略称IGI)というファイルにまとめられています。世界各地から集められた2億人以上の死者に関する出生・結婚・死亡情報が神殿儀式執行日とともに記録され、センターにある「ファミリー・サーチ」を通して検索できる仕組みになっています。わたしの見つけ出した死者の儀式は完了しているか、いつ、どこの神殿でなされたのか簡単に分かります。

反面、自分の提出する名前については、儀式がまだ執行されていないということを自分で確認する責任があります。自分の家族の記録は自分で管理するという原則が貫かれているのです。

日本でも、こんな便利なシステムが欲しいと思われることでしょう。しかしそれを実現するためには、解決すべき様々な課題が横たわっているのです。

## 将来の日本における家族歴史探求

まず第一に、日本におけるコンピューターシステムを構築しなければなりません。これは教会本部家族歴史部の応援がぜひ必要な分野です。日本の家族歴史作業をどのようにして本部のシステムに連結するか。それは、全世界の家族歴史活動の中で日本がどんな役割を担うのかといった、大きな視野の中で考え決定されなければならない問題です。神殿・家族歴史活動を活発化し、大勢の死者に救いの機会をもたらす御業を進展させれば、会員の靈性が高まり、また適切な時期に主がその認可を与えてくださるかもしれません。

また残念なことに、現在のシステム

はアルファベット以外の言語に対応していません。PAFだけでも早く日本語版が欲しい(家族の記録だけでも手書きからパソコン作成にしたい)と有志の会員が挑戦していますが、幾つかの技術的難問があり、完成時期の予想は難しいようです。

\*

システムがかりに完成したとすると、最初に求められるのは、わたしたちの家系をさかのぼり探求するための人名の蓄積です。先祖のファイルに、できるかぎり多くの個人情報を入れ、探求の援助システムを作っていくのです。

ただし、戸籍による探求はせいぜい19世紀後半までで、もしそのほかの資料(過去帳、家系図など)が存在しなければ、そこで停止してしまいます。しかも現在のところ、日本の戸籍制度が公開されるということは、プライバシー保護のためにあり得ないことです。つまり戸籍に基づいた情報は、会員からしか期待できません。では、人名抄出に使っている資料からはどうでしょうか。

抄出の資料は、県市町村史の中にある活字体に解読された系図関連の古文書であることは前に説明をしました。その量は残念ながら非常に限定されています。地域によって差がありますが、記載人名は1県当たり1万前後、ごくまれに2,3万と推定しています。ただし、中には活字本がほとんど出版されていない市町村もありますので、全国合計で6,70万名抄出が限度と思われる。史料の収集をさらに徹底させても、大幅な増加にはなりません。

そこで注目したいのが、家族歴史部所蔵の系図関連の古文書を記録したフィルムです。記録と一口に言っても、その量はおおかたの想像をはるかに超えています。現在マイクロフィルムにして約8,000本の記録があり、1本のフィルムには2,000ページから3,000ページもの古文書が収められています。これはかりにフルタイムの家族歴史宣教師が100人で抄出作業に当たったとしても数年では終わらない量です。

ユタ系図協会の協力を頂き、わたしたちが古文書解読をして、抄出された人名をファイルに入力するのです。古文書の写しがさらに入手できれば、人名数は数百万に達すると推定されます。課題は、古文書解読のできる人材を養成することです。

本格的に古文書による人名抄出を開始するには、多くの解読者を必要とします。現在、東京東ステークの三浦善一兄弟が古文書に精通しておられ、すでに解読に協力をいただいています。興味のある方は、将来に備えて個人での学習を開始されるとよいでしょう。三浦兄弟に教えていただくのも一案です。各地方自治体の教育委員会に電話をすれば、古文書解読のサークルを紹介してもらえます。場所により、古文書会とか郷土歴史研究会といった名称でサークル活動をしているようです。約10年から15年前に古文書ブームが起り、大勢の方が過去の人々と出来事に関心をもちました。今では派手な動きではありませんが、根強く学習を続けている地域があります。神様が準備をして、わたしたちが古文書を読む学習をするためにルールを敷いてくださったのではないのでしょうか。この祝福を最大限に活用していただきたいと思います。我孫子ステークでは、すでに昨年より25人の方が古文書解読訓練を始められています。

\*

現在、家族歴史活動関連の働きは、人名抄出のための史料収集と抄出作業に限定されていますが、将来は多様化していきます。古文書解説、人名抄出作業、また家族歴史センターの運営など多種多様な人材が求められることとなります。何百万人ものデータベースを作ることを考えると、入力一つ取っても、想像もできない人力・時間を要求される大事業であることがお分かりでしょう。パート、フルタイム、自宅勤務、家族歴史センター勤務といろいろな形態で奉仕の機会が生じてきます。通常の教会の責任、伝道、神殿での奉仕に加えて、家族歴史宣教師の召しも、ぜひ人生の設計図の中に入れていただきたいと思ひます。高齢化社会の到来といわれる昨今、定年を迎えられた方々の世代パワーが大いに求められる時代がやって来ています。第二の人生における大きな奉仕と祝福の機会がわたしたちを待っているのです。

「ファミリー・サーチ」を搭載したコンピューターやマイクロフィルム読取機を備え、家族歴史宣教師が優しく家族探求の仕方を教えてくれる「家族歴史センター」。みなさんのステーキや地方部にあつたらどうでしょうか。きっとみなさんと先祖の結びつきをもっと強いものにしてくれることでしょう。

\*

これらは夢でしょうか。いいえ、一日も早く実現するために「地域家族歴史アドバイザー」が召されているのです。「地域家族歴史アドバイザー」は、地域会長会より任命を受け、会員のみなさんが喜んで先祖の探求をし、家族の歴史を作成して神殿に提出する尊い御業のお手伝いをするのが第一の務めです。各地でファイヤサイドを開き、参加者の方々に援助し、4代家族歴史、人名抄出プログラムを推進します。

そして同時に大切な責任は、日本における5年後、10年後の家族歴史のビジョンを設定することです。日本独自

の文化（戸籍制度、氏名漢字表記、毛筆による記録保存など）の中で将来、家族歴史を集大成していく、その実現に向けて難題を一つ一つ解決していくことです。そのために、会員の皆さんの応援と協力がぜひとも必要なのです。（もりむら・ひさお）

現在、「地域家族歴史アドバイザー」は、津村又三郎兄弟（東京ステーキ）。補助は松本潔兄弟（東京ステーキ）・森村久男兄弟（町田ステーキ）の2人です。

●現在、古文書解説勉強会で講師を務めている三浦善一兄弟は、定期的に出かけて教えるほか、神殿訪問の折に管理本部4階の家族歴史部を訪れた方にも、1時間ほどのレッスンを行っています。ご希望の方は、前もって下記までご連絡のうえ、お出かけください。

教会管理本部 家族歴史部

TEL.03-3440-2764

FAX.03-3440-2774



あびこ  
我孫子ステーキでは12人の人名抄出者が、さらに多くの死者の方を古文書から探し出せるようにと月に一度古文書解説勉強会を開いています。そこで今回は、人名抄出者の一人である牛久ワードの根本耀子姉妹にお話と証を伺いました。

## 探求する家族に愛情をそそいで

～神様との共同作業から受ける祝福～

◆まず、姉妹の召しについて教えてください。

わたしは1995年にステーキの人名抄出者の一人として召されました。人名抄出の業に携わることによって、死者を探し求めること、そして我々の子孫と先祖を結ぶことがどれほど大切な責任であるかが分かってきました。そしてこのことに関するわたしの証は、この2年間でほんとうに深まりました。

人名抄出の記録には、名前のほかに身分、財産、年齢、地位といったものまで記入されているんです。何十人もの使用人を雇っていた裕福な人や、幼いころから奉公に出された人、今の日本では考えられないような貧しい生活をしていた農民、いろいろな人がいます。特に、そういう貧しい人たちについてはその生活の苦労が紙面を通して伝わって

くるんですね。読んでいて時々胸が締めつけられることがあります。でも福音のすばらしいところはそういった身分に関係なく、こうして救いの道が備えられているということです。救いには財産とか、地位だとかは関係ありませんから。福音によってその方たちの重荷が軽くなるわけですね。そのお手伝いができることはほんとうに幸せだと思



古文書解読勉強会にて。  
右端が根本姉妹、  
右から2人目が講師の三浦善一兄弟。

います。

また、わたしが今作業している系図の記録はとても古いものです。それだけに不備も多いんですね。今みたいにしちっと整理されていない。複雑に入り込んでいる家族関係もありますし。ですから一つの家族を正しい関係でつなげていくということは想像以上に時間がかかりますし、なかなか根気の要ることなんです。時には何日間にもわたることもあります。

◆そのような仕事に携わるとき、特に注意していることはありますか。

そうですね、気をつけていることは、たとえどんなに救いたいと思っても自分の憶測や無理なこじつけでは決して結びつけないということです。必ず神様の確認を頂くようにしています。少しでもあいまいなところは神様に祈ります。それが正しいなら、心に平安が訪

ずれて、これでいいんだって思えるんですね。祈ることは系図の探求をするうえでほんとうに大きな助けです。ですから、常に祈る気持ちでこの作業に当たっています。そうすると、また別のときに、ふと「あそこはこういうふうにつながっているんじゃないかな」という思いが心に浮かんできて前の資料をひっくり返したりすると、「あ、やっぱり」ということがあるんです。1度や2度だけでなく、よくそんなことがありました。ほんとうに神様の導きです。系図は神様との共同作業だと感じます。

そしてまた、愛情を注ぐということ。セミナーの教師が生徒を愛するように、プライマリーの教師が子供たちを愛するように、探求する家族を愛するんです。愛する気持ちが記録を丹念に丹念に調べさせるんです。すると、ただ機械的にやっ

ただだけでは気づかないような記録を拾うことができます。例えば、嫁いださきの娘さんの記録から同じ村の実のお父さんの名前が分かったのですが、お母さんの名前やそのほかの家族関係が分かりませんでした。両親を簡単に抄出する方法はありますが、できることなら実の両親の正しい名前に結び固めてあげたいと思い、同じ村の記録を全部照合して懸命に娘さんの実のお父さんを探してみました。そうしたらあったんですね。ほんとうにうれしかったです。

そうやって一つ一つの関係が正しくつながっていくときに何とも言い難い喜びを感じます。系図を探求していくことはほんとうに楽しいです。確かにとりかかりにくいですがそれでもやっていくうちにその楽しさはどんどん増し加わっていきます。

◆この召しを受けて、実際の生活のうえでどのような祝福を感じますか。

わたしはこの責任を通して、人から称賛を受けたり、ありがとうと感謝されたりすることはないんです。とても地味な仕事ですし、自宅で家事の合間に少しづつ時間を取ってやっていることなので、このような責任をしていること自体知っている人はごくわずかなんですね。ですけれど、天に宝を積んでいるということはいつも感じます。結果を直接目にはできませんが、それだけに霊界に行き探し出した死者の方々に会いするのがほんとうに楽しみなんです。とはいえ、まだその機会は来てほしくないですけどね。

わたしには4人の子供がいて皆大きくなって、わたしも年を取ったなと思うんですが、こうして主はどこかで奉仕する機会を与えてくださってると思うとほんとうにうれしいです。人名抄出者として働くこの機会に心から感謝しています。死者を贖うという業が確かに御業であることを心から証いたします。(談)

専任宣教師

JMTC 第213期生15人 海外2人 ●上から氏名、任地(伝道地)、出身ユニット



**山口啓輔**  
札幌伝道部  
長野地方部  
長野支部出身



**葉山美雪**  
岡山伝道部  
町田ステーク  
町田第一ワード出身



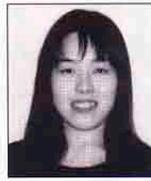
**鈴木望**  
福岡伝道部  
東京東ステーク  
長生ワード出身



**石灰光子**  
岡山伝道部  
富山地方部  
高岡支部出身



**林寛**  
札幌伝道部  
東京西ステーク  
多摩ワード出身



**尾形美紀子**  
神戸伝道部  
郡山地方部  
郡山支部出身



**堀田悟史**  
札幌伝道部  
名古屋西ステーク  
御器所ワード出身



**山地ゆり**  
福岡伝道部  
神戸ステーク  
西宮ワード出身



**中野渡千寿**  
福岡伝道部  
仙台ステーク  
泉ワード出身



**古川小弓**  
東京南伝道部  
松山地方部  
松山支部出身



**糟谷成高**  
福岡伝道部  
名古屋ステーク  
刈谷ワード出身



**池田真喜**  
札幌伝道部  
福井地方部  
武生支部出身



**中井麻貴**  
札幌伝道部  
京都ステーク  
伏見ワード出身



**浅川磨海**  
札幌伝道部  
名古屋ステーク  
名東南ワード出身



**小井真弓**  
札幌伝道部  
長崎地方部  
佐賀支部出身



**八重嶋功子**  
ワシントンD.C.北  
伝道部  
盛岡地方部  
盛岡支部出身



**岡三恵**  
ソルトレーク・テン  
ブルスクウェア訪問  
者センター伝道部  
長崎地方部  
諫早支部出身

ブックセンターだより

初等協会5, 視覚資料 (1997年新刊)

カタログ番号  
35238 300  
A4変 オールカラー両  
面印刷29枚入 500円

教会歴史と開拓者  
に関する視覚資料  
集です。開拓者150年を記念する  
今年、様々な行事、レッスンにて  
ご活用ください。



役員の異動

1997年5月15日から6月7日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の異動(敬称略)

- 秋田地方部  
地方部長: 小林 久
- 仙台ステーク長町ワード  
監督: 田中信吉
- 高崎ステーク前橋ワード  
監督: 須田正弘
- 東京ステーク吉祥寺ワード  
監督: 植並功行
- 東京南ステーク洗足池ワード  
監督: 中部達郎
- 東京南ステーク東京第二ワード  
監督: Bartholomew, Bruce
- 熊本ステーク  
ステーク会長: 角屋光典
- 熊本ステーク大分ワード  
監督: 菅原 宏
- 熊本ステーク熊本ワード  
監督: 藤田明智
- 熊本ステーク清水ワード  
監督: 池上修一
- 熊本ステーク長嶺ワード  
監督: 青木勝洋
- 熊本ステーク大牟田支部  
支部長: 新名 敏宏
- 長崎地方部  
地方部長: 才木 剛
- 長崎地方部諫早支部  
支部長: 竹馬庸裕
- 長崎地方部長崎支部  
支部長: 辻郷美太郎

※熊本地方部は5月18日付けで熊本ステークと長崎地方部に分割されました。

皆さんの原稿を募集しています

◎ご投稿の際には連絡先(住所、電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名を記入し、写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただくことがあります。

◎お願い——海外に召される日本人宣教師たちを紹介いたします。伝道の召しを受け取り次第、編集室に写真を添えてお知らせください。(氏名〔フリガナ〕、伝道部名、召された月を明記)

◎あて先: ☎106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275